

425

108

6 7 8 9 10 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 7

始



工藝美術聚英首編

工藝美術聚英刊行會

支那ノ古語ニ徳ハ身ヲ潤ホスト云ヘリ蓋シ眞ノ徳
ハ蓋然トシテ其身ヲ浸潤スルニ足ルモノナラザルハカラス
是レ個人ニ就テ言ハル所ナルモ大ニシテ民族ニ於テ
モ亦此ノ如キコトアルベシ蓋シ遠キル民族ハ文化ヲ有
ス時トシテハ民族ハ滅亡スルモ文化ハ永ヘキ存スルコ
トアリ但シ文化ナル者ハ虚位ニシテ何等ノ實物ヲ
以テ民族ノ文化ヲ徴スベキカハ次テ来ルルハキ問題
ナリ時トシテハ哲學ニ時トシテハ藝術ニ皆以テ徴ト
スベシトスルモ此等ハ多ク民族中ノ選バラルル一二天
才ニヨリテ制作サルモノニシテ必ズモ民族ノ全體
ニ文化ヲ浸染セルニ由ラズんコトアリ政治ノ如キ最モ
大衆ノ生活ニ關係アルモノナレバ往々寡頭ノ統

治が最良の成績ヲ擧げルコトアリ其レ唯工藝カ
大衆ノ生活ニ必須ナルト同時ニ大衆ノ趣味的欲
カヲ激スルニ足ル故ニ工藝ノ存スルハ以テ民族
ノ文化ノ高キヲ示スモノトイフベク民族ノ高雅ナ
ル生活ハ專ラエレニヨリテ表顯サルハナリ余ハカ
ル見地ヨリ過去ニ於ケル日本民族ノ文化ハ各氏
族間ニ於ケル位置ヲ考フル時、勃馬トシテ自信
ノ念ヲ生ゼシムルコトヲ覺ユ是レ日本が最近五
六十年間ニ示セル統制力ノ偉大ニヨリテ其ノ
強盛ヲ致セルヨリモ更ニ吾人ヲシテ限りナキ
矜誇ノ情ヲ起サシムモノニシテ其ノ感也ト光
輝ノ源泉儻々ハゴトニ在ラシカ

山本湖舟君が編セル工藝美術源泉英ハ實
ニコノ邦ノ感セガ光輝ヲ國民ニ自覺セシム
ヘキ資料ナリ我カ民族文化ノ實質カヲ他氏
族ニ示スヘキ證據ナリ故ニ其ノ三編ノ完成
スルニ於テ喜々テ之ニ序スルコト此ノ如シ夫レ
君が眞率純ノ筆ト其ノ製本版ノ精トハ讀
者自ラ能ク之ヲ見ン何ヲ余カ言フ待ソシヤ
昭和三年十二月内藤虎次郎

425-108



『工藝美術聚英』編纂刊行の趣旨

わが邦は天に恵まれた山水秀麗にして人は生れ乍らに美を愛好するの特性を有してゐる、加之隣邦としては世界最大の文明國支那があつた。わが邦の祖先はあらゆる文化を吸収し、あらゆる文化を創造した、かくしてそのあらゆる藝術が異邦文化の影響をうけて長足の進歩を遂げた。わが工藝美術もまた異邦文化の輸入によつて大なる刺激を享けつ、獨特の發達をこげた。即ち遣唐使の廢止によつて初めてそこに純粹なるわが國民性が、藝術の上にも發光するに至つた。勿論その後にはわが學僧等の海外に渡りて齎せる香たかき異邦藝術が可なり勢力を占めた時代もあつたが、大勢を動かすことは出来なかつた。斯くてわが國民藝術は諸種の方面に育まれ培はれて最も偉大なる根幹を張り更に明治時代歐洲文化を吸収して大正藝術の新時代を開展し來つたのである。されば現代文化の源流をなす古代藝術に對して、苟も斯道に志せる先賢後哲は皆言ひかはしたる如く其の進化の痕をさぐらんとして苦心し、以て之を自家藥籠中のものごなさんと努めたのである。この事たるや新時代の開拓に精進する勇者の當然辿らなければならぬ順路であつて、その研究に觀賞に第一必須條件とせらるべきものは實物觀察の外ないのである、然るに現今それ等總ての珍器名品は或は神社の什寶となり、或は尙古家の祕庫に收められて千金萬金を以てしても購ふ事の出来ないものごなつた。而してその神社所傳の什寶のみが國寶に指定されて世に紹介されて居るに過ぎない、されば如何に熱心なる研究者と雖も親しく之を觸目して比較研究するが如きことは容易の業でない、たゞ從來僅に一部模寫、圖録等を得て多年の渴を醫し或は之を以て惠まれたるもの、みの誇としてゐた時代も可なり久しい、併し乍ら眞摯なる研究者にとつては模寫は動もすれば實物と甚しき軒輊を生じ易く、實際の資料たるに適せざる憾みを感じる場合が尠からずあつた。

茲に於て吾等はあらゆる時代の要求に加ふるに寫眞印刷の進歩と斯界の知識を結集して本邦最初の純粹工藝美術編纂刊行の業を企て、既に四ヶ年の日子を累ね、非常なる苦心と努力の結果漸く全三編三百六十圖を收載するわが邦空前なる一大圖録を完成する事を得たのである。わが國の古藝術がその年代の久しきその製作の優秀なる世界藝術の首位を占め且つ世界的古藝術の寶庫を以て目されてゐる事は敢て茲に啖々することを要しないであらう、本書は實にその世界的なるわが國の古代藝術の幽庫から民衆的見地に起て工藝美術の神髓と目せらるべきもの一切を立體的に結集し而も一世の知識を傾けて解説を施したのである。故に大正時代の工藝美術に關する無比の學的道標であると言つ



ても決して過言ではないのである。所收の圖版は三百六十圖中之を約五種に分つことを得る

△金工品百餘點 △漆漆品百餘點 △陶磁器約五十餘點 △其他約二十點

形體は固より、文様圖案の優秀なるものは其一部を擴大し、或は又必要に応じて側面圖、断面圖等を印影し、而も各圖毎に懇切なる諸大家の説明を附して、目のあたり聴くが如き感あらしめてあるから、恐らく本圖録の閲覧者は現品に就て研究する以上の便益と効果を感じざるゝであらう事を確信する。

亦今日の文化を以てしてこれ以上の最善の研究資料を編纂刊行する事は不可能に属することを断言して憚らないのである。然して本書の價値たるや我が會員一部の占有に委すべきものではなく、廣く世界的に頒布すべき性質のものである、茲に美術工藝若は工藝美術の研鑽に志を抱く人々は勿論苟も祖國文化の本質に觸れんとする一般識者に對してこの際廣く頒布しておかねばならぬ劃期的出版であるを信じてゐる。

冀くはこの過去千有餘年來の遺利寶玉をその今日までに到達し得たるわが國工藝美術の學的一大道標が單にえられたる吾等同人の業蹟とみに解せられず進んで現代人の各自が斯道に關する知識を集積したるものとて之を仔細に點檢し活用して更に百尺竿頭一步を進むるの階梯たらしめられんことを敢て天下の高士に希望して止まない次第である。

大正十五年十月

工藝美術聚英刊行會

本會顧問

(本書編纂時の職名に據る)

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 京都帝國大學教授 工學博士 天沼俊一 | 京都帝國大學教授 文學博士 內藤湖南 |
| 京都美術工藝學校教諭 猪飼嘯谷 | 京都帝國大學教授 文學士 中村直勝 |
| 京都陶磁器講習所長 大須賀眞藏 | 京都帝國大學教授 文學士 中村旭峰 |
| 東京美術學校教授 香取秀眞 | 京都帝國大學教授 文學博士 濱田青陵 |
| 京都府立圖書館長 北畠貞顯 | 京都帝國大學教授 文學士 廣瀬都巽 |
| 京都府社寺課技師 阪谷良之進 | 朝鮮總督府博物館調査官 文學士 藤田亮策 |
| 奈良帝國博物館學藝委員 關保之助 | 奈良帝國博物館調査官 山本規矩三 |
| 京都帝國大學教授 工學博士 伊達彌助 | 京都美術工藝學校教諭 山鹿清華 |
| 京都帝國大學教授 工學博士 武田五一 | 刊行會美術代表者 山本湖舟 |
| 東京帝國博物館歴史課長 文學博士 高橋健白 | |

工藝美術聚英總目錄

工藝美術聚英首編目錄

同	同	同	全
畫	普 ^五 文	分	參
引	樣	類	編
索	索	目	總
引	引	錄	目
二	七	八	錄
頁	頁	頁	十八
			頁

第一編

十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
		同	同	同	國寶		同	國寶		同	國寶			同	同	同	同	國寶
秋草蒔繪鏡臺	南河原黛色繪輪花式平皿	丸寓生文螺鈿移鞍	同	葛蒔繪小唐櫃	二方白二枚梅星兜	葡萄文薰草	陶製吃哩香爐	華原磬	縫	堆朱香盆	瑞花双鳳八稜鏡	華式香籠	匣式香爐	戒體箱	同	蓮唐草蒔繪經箱	兵庫鎖太刀金具細部	太刀
桃山時代	德川時代	平安朝初期	同	豐臣時代	天平時代	仁清作	桃山時代	明時代	平安時代	鎌倉時代	同	同	同	平安時代	同	同	鎌倉時代	
同	京都	奈良	同	廣島	和歌山	奈良	京都	奈良	京都	滋賀	三重	滋賀	同	京都	同	福井	同	和歌山
廣瀨都巽氏藏	杉浦丘園氏藏	手向山神社藏	同	嚴島神社藏	加太神社藏	東大寺藏	法金剛院藏	興福寺藏	瑞泉寺藏	來迎寺藏	金剛證寺藏	神照寺藏	建仁寺藏	醍醐寺藏	同	神宮寺藏	同	丹生都比賣神社藏

百三	百二	百一	百	九十九	九十八	九十七	九十六	九十五	九十四	九十三	九十二	九十一	九十	八十九	八十八	八十七	八十六	八十五	八十四	八十三	
同	同	國寶				同	國寶			同	國寶				國寶						
同	同	刺繡釋迦如來說法	縫	同	同	立	翫	豐	城	陶	同	金	刺	同	蘆	蒔	蒔	前	木	木	
部	部	繡釋迦如來說法		部	部	菊文蝶	具	臣棄丸坐	端蒔繪方形	製	部	銅	繡	御	屋	繪	繪	拳	彫	彫	
分	分			分	分	細		坐	形	水	分	髹	褥	分	文	鼓	机	及	端	欄	
圖	圖	圖	箔	圖	圖	鞍	船	像	盆	注	圖	毬	裂	圖	釜	庫	胴	箱	框	間	
同	同	天 平 時 代	桃 山 時 代	同	同	鎌 倉 時 代	同	桃 山 時 代	德 川 中 期	尾 形 乾 山 作	同	鎌 倉 時 代	同	足 利 時 代	桃 山 時 代	南 北 朝 時 代	足 利 末 期	同	桃 山 時 代		
同	同	京 都	同	同	同	同	同	同	同	京 都	同	和 歌 山	同	同	同	京 都	同	同	同	滋 賀	
同	同	勤 修 寺	瑞 泉 寺	同	同	關 保 之 助 氏	玉 鳳 院	同	同	京 都 市 立 美 術 工 藝 學 校	同	丹 生 都 比 賣 神 社	某 氏	同	大 西 清 右 衛 門 氏	高 臺 寺	同	寶 嚴 寺	同	都 久 生 須 麻 神 社	
上	上	藏	藏	上	上	藏	藏	上	上	藏	上	藏	藏	上	藏	藏	上	藏	上	藏	藏

八十二	八十一	八十	七十九	七十八	七十七	七十六	七十五	七十四	七十三	七十二	七十一	七十	六十九	六十八	六十七	六十六	六十五	六十四	六十三	六十二	
		國寶							國寶												
木	木	俱	布	青	同	青	綾	草	木	同	蜘蛛網板屋楓蒔繪硯箱	黑地金平蒔繪文臺	風	風	天	繡	笈	婦	室	室	
彫	彫	利伽羅龍守	貝鉛嵌入蒔繪	花蝶鳥文銅	部	海塗	草花蝶鳥文銅	花蝶鳥文銅	彫彩色假面	部	分	形	俗人	俗人	平	紗	文	女	內	內	
間	間	刀	盆	硯	圖	箱	硯	硯	面	分	箱	臺	形	形	裂	紗	彩	彩	裝	裝	
同	同	桃 山 時 代	道 八 作	同	同	德 川 中 期	飛 鳥 朝	同	藤 原 時 代	同	桃 山 時 代	足 利 時 代	同	德 川 時 代	天 平 時 代	明 末 時 代	足 利 時 代	宋 時 代	同	桃 山 時 代	
同	滋 賀	同	同	同	同	京 都	奈 良	東 京	京 都	同	滋 賀	京 都	同	同	同	京 都	奈 良	東 京	同	滋 賀	
都 久 生 須 麻 神 社	寶 嚴 寺	妙 心 寺	飯 田 新 七 氏	同	同	京 都 市 立 美 術 工 藝 學 校	法 隆 寺	大 坪 正 義 氏	教 王 護 國 寺	同	來 迎 寺	金 連 寺	同	同	京 都 帝 室 博 物 館	曼 珠 院	藏 王 堂	長 野 草 風 氏	同	都 久 生 須 麻 神 社	
藏	藏	藏	藏	上	上	藏	藏	藏	藏	上	藏	藏	上	藏	藏	藏	藏	藏	藏	上	藏

第一編

十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
國寶			同	同	同	同	同	國寶							同	同	國寶	
木彫彩色華鬘	錦陶製鉢	唐華文螺鈿如意	金銅花鳥文毛彫如意	同部分圖	同部分圖	同部分圖	梅花透彫金具付甲冑	鍍金鳳凰文說相箱	十二月月圖十柱香箱	陶製小皿	摺箔地無小袖裂地	蒔繪螺鈿立鶴文鏡奩	木彫獅子	蓬萊飛鶴鏡	牡丹文螺鈿鞍	同部分圖	木彫彩色天蓋	
鎌倉時代	藤原時代	平安初期	平安初期	同	同	同	鎌倉時代	藤原時代	德川中期	乾山作	同	德川初期	桃山時代	同	鎌倉時代	同	平安時代	
奈良	同	同	京都	同	同	同	奈良	滋賀	京都	石川	同	同	同	京都	石川	同	京都	
靈山寺藏	聖護院藏	廣瀨治兵衛氏藏	醍醐寺藏	同	同	同	春日神社藏	西明寺藏	毘沙門堂藏	石川縣立商品陳列所藏	同	同	同	本派本願寺藏	杉浦丘園氏藏	白山比咩神社藏	同	教王護國寺藏

七

百二十	百十九	百十八	百十七	百十六	百十五	百十四	百十三	百十二	百十一	百十	百九	百八	百七	百六	百五	百四
							國寶					國寶				
蒔繪香盆	蜀磁獅子香爐	青磁獅子香爐	同部分圖	蒔繪文臺硯箱	陶製開扇式鉢	齊建武五年神獸鏡	錫杖	刺繡御褥裂部分圖	金銅經箱	同部分圖	玉鑄型文蒔繪柵	銅鐘	蒔繪香盒三種	金唐革	金唐革	古九谷窯花鳥皿
桃山時代	天平時代	明時代	同	德川末期	木米作	天平時代	鎌倉時代	藤原時代	同	德川初期	藤原時代	同	同	同	同	德川初期
京都	奈良	同	同	京都	大阪	京都	滋賀	京都	滋賀	同	東京	滋賀	同	同	京都	石川
京都市立美術工藝學校藏	法隆寺藏	聖澤院藏	同	同	野村德七氏藏	富岡益太郎氏藏	常樂寺藏	某氏藏	延曆寺藏	同	長野草風氏藏	圓滿院藏	伊藤市立美術工藝學校藏	同	同	狩野秀峰氏藏

六

八十三	青銅	三具	足	足利末期	滋賀	來迎寺	藏
八十四	混鹿子刺繡	小袖	額	德川中期	京都	伊達彌助氏	藏
八十五	木造	扁額	子	平安末期	奈良	東福寺	藏
八十六	胡德樂用	瓶子	子	同	奈良	手向山神社	藏
八十七	蒔繪	厨子	子	同	京都	報恩寺	藏
八十八	葎手繪	梅樹水禽蒔繪	手筥	南北朝時代	京都	三島神社	藏
八十九	同	部分	圖	鎌倉時代	同	同	上
九十	同	部分	圖	鎌倉時代	同	同	上
九十一	木造	墓	股	同	京都	醍醐寺	藏
九十二	明器	騎馬俑	備	同	京都	堂本印象氏	藏
九十三	陶製	蠻人燭臺	燭臺	同	東京	堂本印象氏	藏
九十四	牡丹獅子文	螺鈿	鞍	同	滋賀	長野草風氏	藏
九十五	同	部分	圖	同	同	三大神社	藏
九十六	鳳凰桐文	散し沈金彫	經筒	同	同	神照寺	藏
九十七	金銅	經筒	筒	平安時代	奈良	金峰神社	藏
九十八	獅子造	兵庫鎖	太刀	同	和歌山	丹生都比賣神社	藏
九十九	同	部分	圖	鎌倉時代	同	同	上
百	同	部分	圖	同	京都	高臺寺	藏
百一	金銀	銅鳳	文鏡	同	京都	京都帝國大學文學部保管	藏
百二	瑞花	雙鳥	八稜鏡	平安時代	三重	勢多神社	藏
百三	唐草	鴛鴦	五花鏡	同	同	同	藏

六十二	盤龍	四神	鏡	漢樂浪郡時代	朝鮮	朝鮮總督府博物館藏	藏
六十三	純金	附飾	三玉	漢樂浪郡時代	同	同	上
六十四	金銀	裝太	刀	新羅統一以前	同	同	上
六十五	青銅	鏤	斗	新羅統一以前	同	同	上
六十六	綠釉	四天	王	新羅統一時代	同	同	上
六十七	青磁	象嵌	雲鶴文	高麗時代	同	同	上
六十八	黑釉	草葉	文	同	同	同	上
六十九	白磁	刻文	水注	同	同	同	上
七十	唐華	文	花瓶	同	同	同	上
七十一	五獅子	如花	意	平安初期	奈良	東大寺	藏
七十二	同	部分	圖	同	同	同	上
七十三	仲津媛	皇后御木	像	同	同	同	上
七十四	同	背面	圖	同	同	同	上
七十五	石彫	獅子	圖	高麗時代?	京都	由岐神社	藏
七十六	同	部分	圖	同	同	同	上
七十七	同	部分	圖	同	同	同	上
七十八	同	部分	圖	同	同	同	上
七十九	同	部分	圖	同	同	同	上
八十	同	部分	圖	同	同	同	上
八十一	同	部分	圖	同	同	同	上
八十二	同	部分	圖	同	同	同	上

第三編

一	小倉山蒔繪硯箱	德川初期	滋賀	淨信寺	藏
二	古波斯騎馬人物圖彩繪鉢	西歷十二世紀	京都	橋本關雪氏	藏
三	土耳其青釉魚鳥文平皿	同	同	同	藏
四	染付蓋壺	永樂保全作	同	杉浦丘園氏	藏
五	浮世佛人形	元祿時代	滋賀	中村寅吉氏	藏
六	四方佛畫像石	支那北齊時代	京都	山中次郎氏	藏
七	同	同	同	同	藏
八	同	同	同	同	藏
九	金小實色々絨袒形具足	豐臣時代	同	河路豐吉氏	藏
十	圓鑑國師法衣	足利時代	同	三立支院	藏
十一	銀象嵌水瓶	高麗時代	朝鮮	朝鮮總督府博物館	藏
十二	同	同	同	同	藏
十三	辰砂描壺	李王朝	同	同	藏
十四	古波斯陶鉢	西歷十二世紀	京都	橋本關雪氏	藏
十五	木彫彩色社殿脇障子	室町時代	滋賀	油日神社	藏
十六	木彫彩色社殿脇障子	同	同	同	藏
十七	沃懸地螺鈿唐華文平胡篋	鎌倉時代	神奈川	鶴岡八幡宮	藏
十八	能樂盡し蒔繪硯箱	德川時代	滋賀	柴田源七氏	藏
十九	同	同	同	同	藏

二三

百四	唐草花噴	平安時代	三重	多度神社	藏
百五	唐草花雙鳥	同	同	同	藏
百六	藤花散	同	同	同	藏
百七	秋菊飛蝶	同	同	同	藏
百八	薄草雙鳥	同	同	同	藏
百九	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十一	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十二	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十三	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十四	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十五	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十六	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十七	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十八	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百十九	唐草雙鳥	同	同	同	藏
百二十	唐草雙鳥	同	同	同	藏

二三

八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	百	百	百	百	百	百
國寶	同	同	同	同	同	同	同	國寶	同	同	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶	國寶
健陀	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
穀	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部
袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟	袈裟
平安初期	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
京都	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
教王護國寺	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上

六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二
國寶	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
明器	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華	相華
唐時代	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
京都	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
橋本關雪氏	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏	藏

工藝美術聚英分類目錄

百二十四	同	神	德川時代	京都	稻荷神社藏
百二十九	同	寶相華螺鈿文須彌壇	鎌倉時代	奈良	當麻寺藏
百三十八	同	小形調度品	同	同	同上
百三十七	同	檜扇	同	同	同上
百三十六	同	檜扇	同	同	同上
百三十五	國寶	鈴杵	平安初期	廣島	嚴島神社藏
百三十四	同	巴瓦	同	同	同上
百三十三	同	唐草瓦	新羅統一時代	京都	伊藤庄兵衛氏藏
百三十二	同	唐三彩	唐時代	滋賀	下郷共濟會藏
百三十一	同	埃及古彩	西歷五六世紀	京都	山鹿清華氏藏
百三十	同	黃金製耳環	同	東京	東京帝室博物館藏
百二十九	同	金銅空鏤馬具	同	東京	東京帝室博物館藏
百二十八	同	金銅空鏤鞍橋飾板殘缺	同	大阪	譽田八幡宮藏
百二十七	同	上古象嵌	上古時代	東京	東京帝室博物館藏
百二十六	同	古代刀劍裝具	奈良古時代	京都	關帝國大學文學部氏保藏
百二十五	國寶	赤地錦半臂	平安時代	同	同上
百二十四	同	黃楊木神馬	鎌倉末期	廣島	嚴島神社藏

百十九 同 梅樹 雙雀鏡 土師神社藏 百十七 古糸 銅印 十三 種種 四

九 小實色々鏡 祖形具足 河路豐吉氏藏 七十三 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十 象嵌 分 水 關 朝鮮總督府博物館藏 七十八 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十一 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 七十九 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十二 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十一 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十三 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十二 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十四 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十三 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十五 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十四 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十六 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十五 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十七 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十六 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十八 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十七 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
十九 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十八 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏
二十 鑄出人物 鑄像 銅 關 朝鮮總督府博物館藏 八十九 銀象嵌 八 香鏡 同 杉浦丘園氏藏

影工

九 推 朱 香 來迎寺藏 六十九
十 推 朱 香 來迎寺藏 七十三
十一 推 朱 香 來迎寺藏 七十八
十二 推 朱 香 來迎寺藏 八十二
十三 推 朱 香 來迎寺藏 八十六
十四 推 朱 香 來迎寺藏 九十一
十五 推 朱 香 來迎寺藏 九十五
十六 推 朱 香 來迎寺藏 九十九
十七 推 朱 香 來迎寺藏 一百零三
十八 推 朱 香 來迎寺藏 一百零七
十九 推 朱 香 來迎寺藏 一百一十一
二十 推 朱 香 來迎寺藏 一百一十五

一 木形彩色分天 教王護國寺藏 五十五
二 木形彩色分天 教王護國寺藏 七十三
三 木形彩色分天 教王護國寺藏 七十八
四 木形彩色分天 教王護國寺藏 八十二
五 木形彩色分天 教王護國寺藏 八十六
六 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十一
七 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十五
八 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十九
九 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百零三
十 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百零七
十一 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百一十一
十二 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百一十五

一 木形彩色分天 教王護國寺藏 五十五
二 木形彩色分天 教王護國寺藏 七十三
三 木形彩色分天 教王護國寺藏 七十八
四 木形彩色分天 教王護國寺藏 八十二
五 木形彩色分天 教王護國寺藏 八十六
六 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十一
七 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十五
八 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十九
九 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百零三
十 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百零七
十一 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百一十一
十二 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百一十五

一 木形彩色分天 教王護國寺藏 五十五
二 木形彩色分天 教王護國寺藏 七十三
三 木形彩色分天 教王護國寺藏 七十八
四 木形彩色分天 教王護國寺藏 八十二
五 木形彩色分天 教王護國寺藏 八十六
六 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十一
七 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十五
八 木形彩色分天 教王護國寺藏 九十九
九 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百零三
十 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百零七
十一 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百一十一
十二 木形彩色分天 教王護國寺藏 一百一十五

百十三
五十三

金菊
葡萄
唐文
畫
草
東大寺
野秀峰氏藏

第一編

其他

百二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十

製同凡三鞠茶同紺園
地雪鑑
部實東屋部部
張珠上分
屏分文
風圖鈴錦下染圖服衣
智同仁華柴同關三
恩納治兵衛七氏藏
院氏藏藏藏藏藏藏
藏上藏藏藏藏藏藏
百十一百五九十九八十八
百三十九百九十八百八十七

埃赤一羅倭同製製
及地切刺部裝裝
古錦繪屏屏
代半樂二
製胃袂製種圖風風
山嚴廣同教同同同
鹿島瀬都護國上上上
清神氏社氏寺
藏藏藏上藏上上上

百四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十

鶴唐同肩錦摺
九花部無小袖製
文文分
藏金
織紗圖裾地
同大浦聖京都市立美術工藝學校藏
德神護社院
寺社藏藏藏藏藏藏
上藏上藏藏藏藏藏
百二十百八十四百五十七
百十九百九十九百八十七

太太混紗七
鹿刺製製
刀刀子裝裝
平平刺見黃
平平編遠山
緒緒袖リ裁
關關出伊行
雲保路者
之助次助山
氏氏氏氏寺
藏藏藏藏藏藏

百五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十

縫刺綾天繡ゴ
繡平ラ
御梅ン
箱製製紗織
瑞某法京受同
泉隆帝室博物院藏
氏寺寺館藏
藏藏藏藏藏藏
百十九百百百百
百九百百百百
百九百百百百

蜀刺同同刺繡
繡部部通
紅御如來
分分說
繡製圖圖圖
法某同同勳
隆氏寺寺
藏藏上上藏

百二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十

羽同花縫
鳥刺繡
部繡
分子法
繡圖被箱
豐同相瑞
國國泉
社寺寺
藏上藏藏
百四十一百三十八
百三十八百三十七

ゴ天同大
部部如
ラ平來
ン分刺
繡製圖軸
長京同野
濱都帝野
町室家秀
博博博峰
物物物氏
館館館藏
藏藏藏上

染織

百四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四

繪白青青白唐繪古古
磁磁磁磁磁磁磁磁
象象象象象象象象
嵌嵌嵌嵌嵌嵌嵌嵌
花水音
瓶瓶瓶注像盤麗
同同同李李李李李李
上上上上上上上上
百四十三百四十二百四十一
百四十百三十九百三十八
百三十七百三十六百三十五

巴唐唐湖色明三給青青繪繪
東群繪繪繪繪繪繪
三繪繪繪繪繪繪
草染繪繪繪繪繪繪
彩付雲龍鳥
瓦瓦伯種里馬碼瓶注爐瓶瓶
同伊下榮佐橋同同同同同
上上上上上上上上上上上上上上上上
藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏

百三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十

綠瀝磁支御陶陶
袖陶州部刺製製
四窯古代庭式小
天袖筋彫彫唐平
王香花土草陶
瓶瓶瓶瓶瓶瓶瓶瓶
堂本印象氏藏
朝鮮總督府博物館藏
百五十六百五十五百五十四
百五十三百五十二百五十一
百五十百四十九百四十八
百四十七百四十六百四十五

宋宋陶明唐白黑青
赤製器華磁釉象
繪三繪繪繪繪繪繪
三彩彩彩彩彩彩
彩陶馬花文文文文
小燭燭燭燭燭燭
鉢枕臺筒瓶注瓶瓶
守橋長堂同同同同同
屋本野本印
孝關草風象
藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏
藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏藏

六

猪	犬	電	稻	磯	鉛	匣	扇	鷓鴣	秋	あ	瓜	牽	蘆	脚	海	網	芦	脚	蘆	牽	あ	秋	鷓	扇
の	の	光	田				散	草	だ	瓜	牛	花	花	草	手	手	手	草	草	瓜	草	鷓	散	
一ノ〇五	二ノ一一七	一ノ八六	三ノ八八	一ノ七六	二ノ三二	一ノ六	一ノ二六	一ノ〇〇	一ノ〇〇	二ノ五	一ノ九四	一ノ九四	一ノ九四	一ノ九四	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五	一ノ五

梅	梅	雲	う	雲	海	馬	雲	團	鷓	渦	牛	兎	鶯	桃	魚	鷓	隠	家	岩
の	龍	龍	ん	ん	ん	珠	珠	扇	文	文	文	文	文	花	魚	鷓	元	元	元
三ノ九六〇	一ノ八八	一ノ八八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八	一ノ四八

折	萬	澤	女	大	車	尾	鬼	尾	尾	踊	鶯	小	沖	翁	老	枝	鱗	瓜
鳥	年	年	郎	原	前	長	長	長	長	草	草	草	草	松	菊	形	形	形
二ノ一八	二ノ三五	二ノ九〇	一ノ八七	一ノ六九	一ノ二〇	一ノ八七	一ノ六六	一ノ八二	一ノ八二	一ノ六八	一ノ六五	一ノ五五	一ノ二五	一ノ二五	二ノ六〇	二ノ六七	二ノ六七	三ノ七四

畫

引

索

引

車 前 草	折 鳥 帽 子	四 花 形	區 花 形	片 輪 車	水 汀	心 葉 形	五 花 文	公 卿	丸 窩 生	土 坡	乞 巧 奠	女 郎 花	小 草	八 稜 形	几 帳
	七		五				四				三			二	
	畫		畫				畫				畫			畫	
お ノ 部	お ノ 部	し ノ 部	い ノ 部	か ノ 部	み ノ 部	し ノ 部	こ ノ 部	く ノ 部	ま ノ 部	さ ノ 部	き ノ 部	お ノ 部	お ノ 部	や ノ 部	き ノ 部

納 會 利	紗 綾 形	差 貫	俱 利 加 羅 龍	高 士	桃 花 魚	海 浦	海 磯	海 人	十	架 垂	架 垂	迦 陵 頻 迦	九	青 海 波	花 喰 鳥	蚪 龍 文	花 綬	八	忍 冬 唐 草	沙 羅 樹	杏 葉
									十				九					八			
									畫				畫						畫		
な ノ 部	さ ノ 部	さ ノ 部	く ノ 部	か ノ 部	う ノ 部	か ノ 部	う ノ 部	あ ノ 部		た ノ 部	た ノ 部	か ノ 部		せ ノ 部	は ノ 部	き ノ 部	か ノ 部		に ノ 部	さ ノ 部	き ノ 部

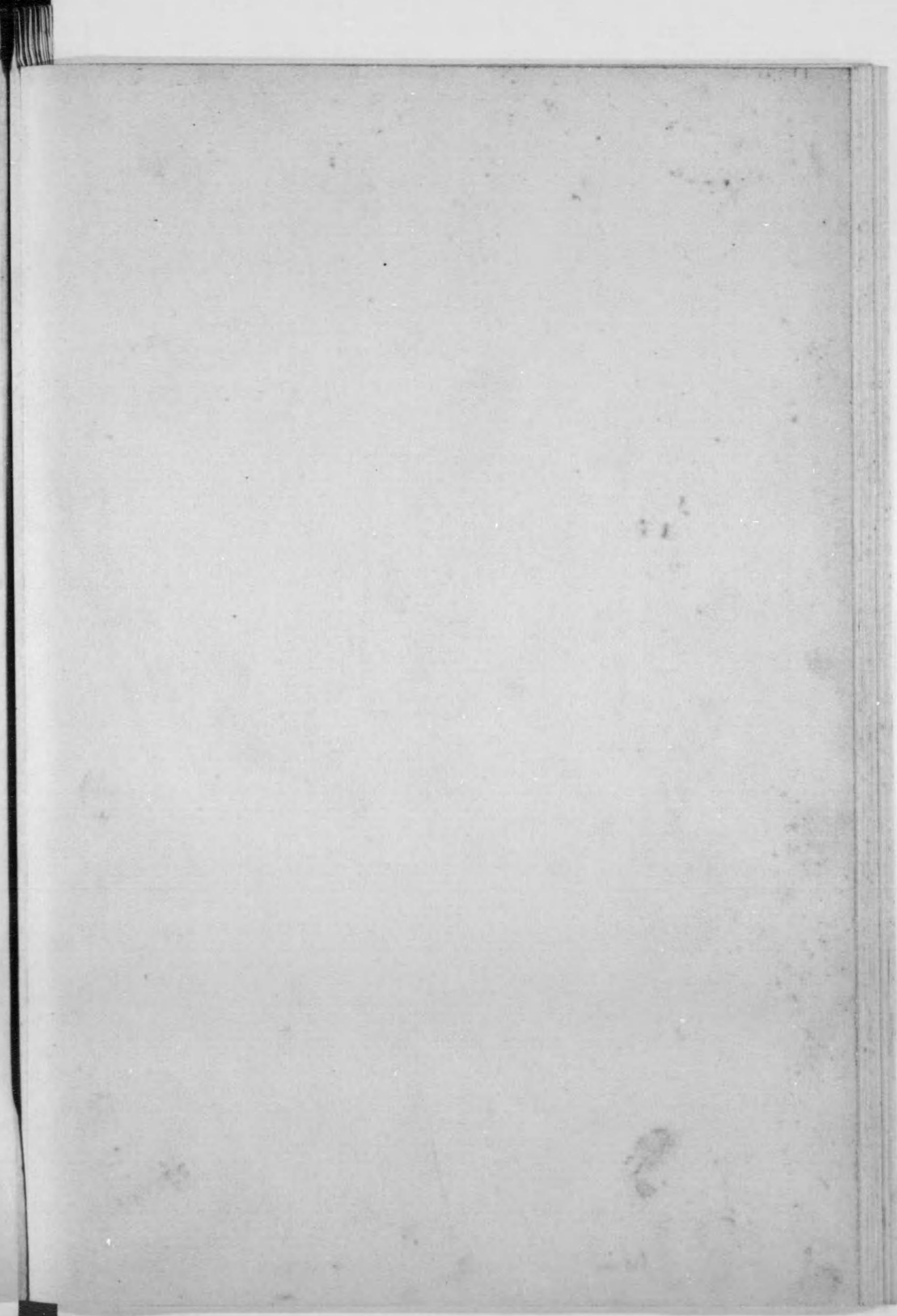
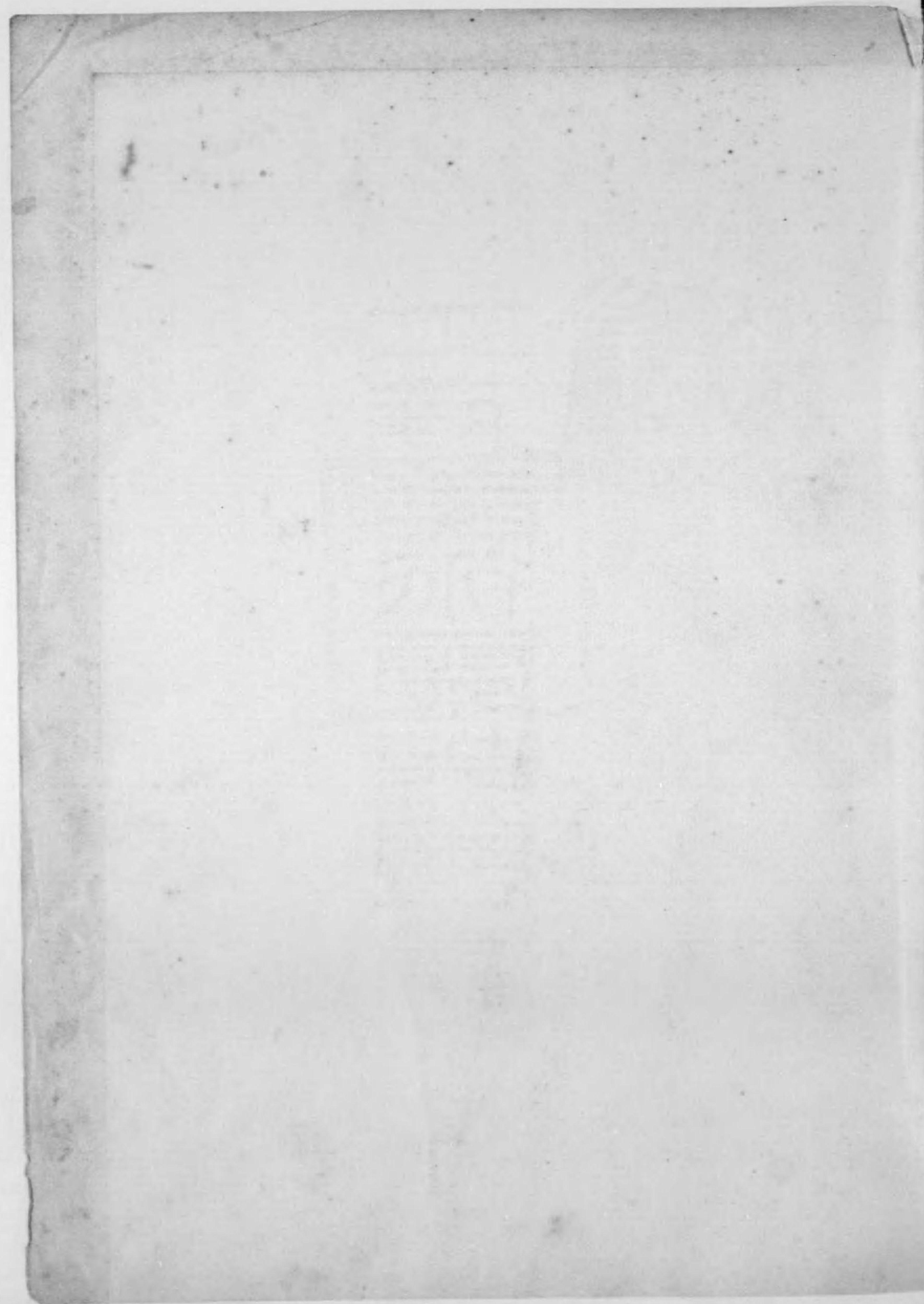
蜀 江 繫	葛 年 青	萬 年 青	窠 文	十三	窩 生	傍 續	須 彌 山	勝 見 草	開 敷 蓮	渦 文	雲 珠 文	堅 牢 地 神	十二	瓶 子 旋 子	捻 花	兜 巾	旋 毛 文	蛇 籠	毳 杖	脚 草	牽 牛 花	十一
				十三									十二									十一
				畫									畫									畫
し ノ 部	か ノ 部	お ノ 部	く ノ 部		ほ ノ 部	そ ノ 部	し ノ 部	か ノ 部	か ノ 部	う ノ 部	う ノ 部	け ノ 部		へ ノ 部	ね ノ 部	ま ノ 部	せ ノ 部	し ノ 部	き ノ 部	あ ノ 部	あ ノ 部	

一、本索引ハ普通讀ミ易キモノヲ含マズ
 二、畫字ノ下ニアル片假名ハ文様索引ノ
 ソノ部ヲ見ヨト云フ符號ナリ

葉	雷	種	翠	蒲	餌	齒	熨	輪	鋸	龍	龍	擬	鞆	織
簀	文	字	簾	英	袋	朶	斗	寶	齒	臺	膽	寶	摩	藏
は	繁	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
ノ	ノ	四	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部

蘭陵王 二十一畫 六ノ部

昭和三年八月十五日印刷 (非賣品)
 昭和三年八月廿一日發行
 編輯者 工藝美術聚英刊行會
京都市西條大橋東詰川端北
 發行所 同 山本湖舟
 工藝美術聚英刊行會



賜天覽

賜台覽

下
凡



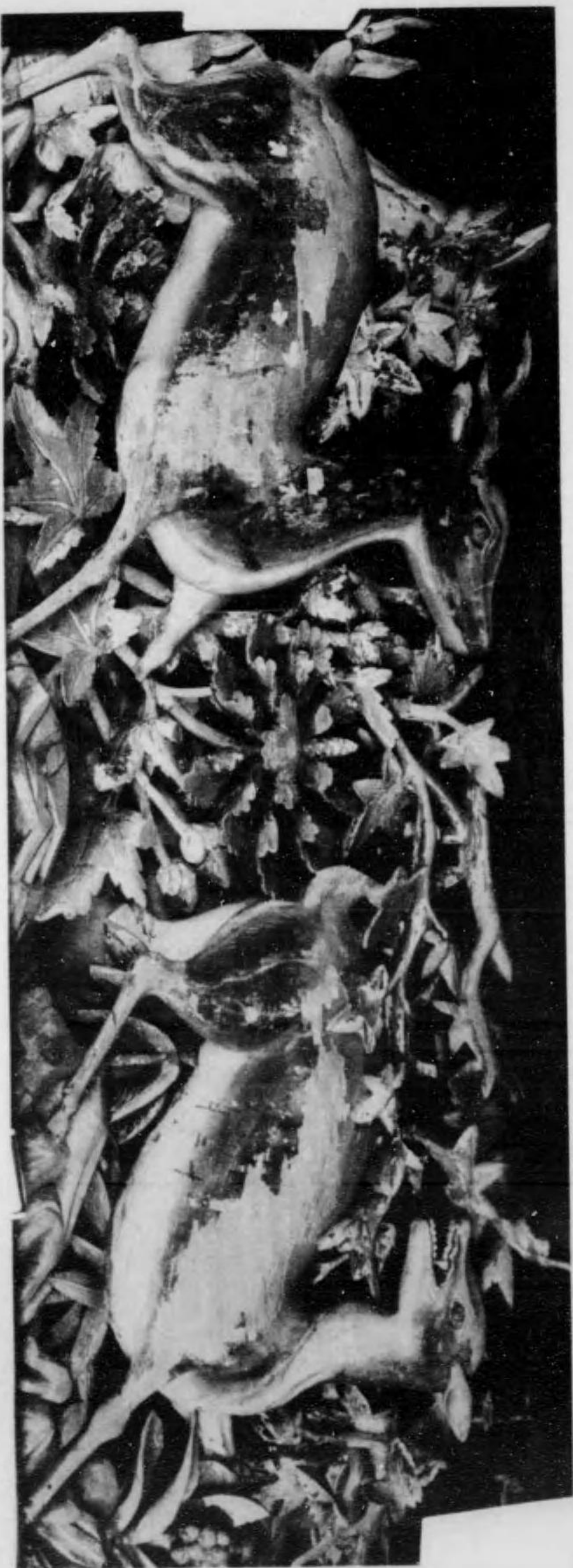
第
二
編

第八十一回
木影山殿實徳寺
間欄

吾邦に藝術史上唯一傑作の大空に富み潤たる時代精神の光
 輝を遺憾の存するは實に後山時代に興たせるのみ、本園より
 第八十回所載ものは、總て同様に屬する近世山宮實徳寺觀
 音堂及び裏面七層塔六十二、三圖中に家内裝飾の端を掲げし回
 廊帶久矣殊殊木構等の各箇所に見られたる裝飾彫刻更に部分
 的に示せるも、觀音堂は唯獨の在るこのこの非無餘で
 老樹觀音堂の存在を主眼布上に建造せられし亭にして、非獨
 共に等しく殿内七層塔の伏見桃山城の一部を移築せられたる
 なり。

本園に掲ぐることは即ち觀音堂向拜上の欄間の彫刻にして格に
 は及ばず美藝の花卉を配し、一格には鳳鳥に花唐草を配せられ
 たり、孰れも胡粉地に顯なる色彩を而かも豪麗に施さる。

繪師 實徳寺觀音堂欄間



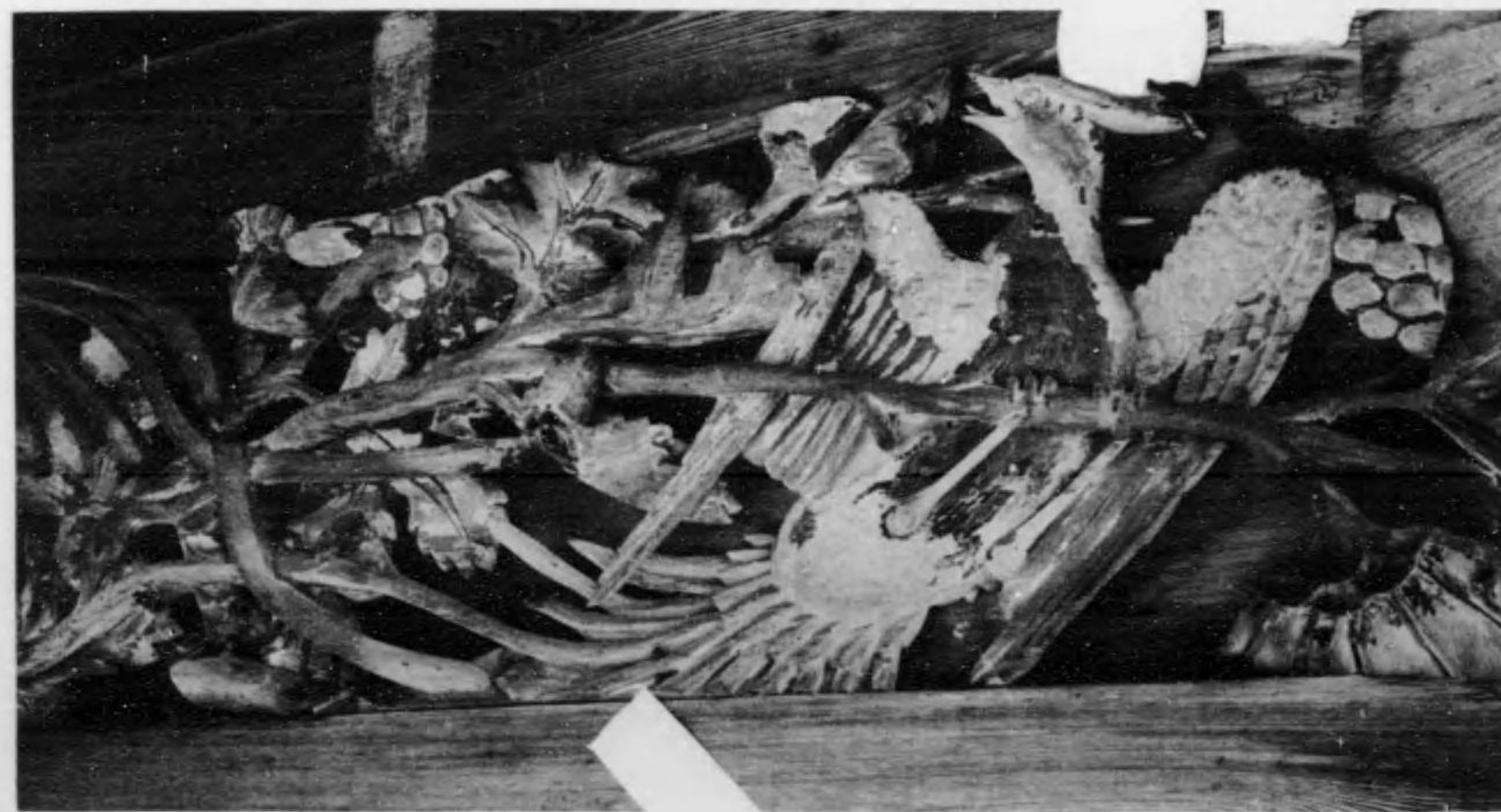


圖 二 十 八 第

間 欄 彫 木

代 時 山 桃

藏 社 神 摩 須 生 久 都 縣 賀 滋

この彫刻は都久生須摩神社本殿外陣中央欄間に在るものを上下に分ちて掲げしものなるが、上段の欄の折釘を打ちし箇所は此欄間の中央に當りて平素額を懸けし所なるを這回額を撤して撮影せしものなり、右方の部は更に之を下段に示せり比較して全局を説覽せられん事を望む、次の第八十三圖は此中央の欄間を狭みて左右に相對せる箇所を寫し掲げたり、現在は色彩剥落して其貌を正めざるも當時は恐らく絢爛たりしを思はしむ、此三圖を全局として更に對照せば正に菊花燦爛として咲き誇れる間を尾長鳥の相呼應し、嬉々として縦横に飛翔せる大轟雷の展開構成せらるゝを觀る、實に當代巨匠の遺せる手腕の存せるところを謂ふべし。

附 言

近時江戸以來の低級趣味なる千社参りの風は、我が京畿の地に興ひ來りて益々熾盛となり、這回掲げし建築彫刻等を初め、到る所の貴重すべき建造物其他懸額等に迄貼付し、以て彩色を汚損し美觀を破壊し其餘習は停止する所なし、此の如き行爲は其前に於ても取締りなすに同時に又關係社等に於ても嚴重保護せられん事を切望するところなり。本圖に於ても此の禍を蒙れる部分ありしを以て之を抹消したり。

國 立 京 都 大 學 工 藝 學 部 工 藝 學 科 工 藝 學 講 義 室



圖三十八第
 問 欄 彫 木
 代 時 山 桃
 藏 社 神 摩 須 生 久 都 華 寶 堂

第八十二圖全照。

第九百一十號美術圖書

第 十八 四 圖
木 彫 拳 端 及 詩 繪 框
代 時 山 桃 實 鐵
鐵 社 神 摩 須 生 久 都

本圖は都久生須摩神社外陣欄間の左右にある拳端に施され彫刻に
して、菊花及牡丹の折枝を透し彫となり形取せられ是亦色彩ありし
ものならむも今其跡を止めず。又上部に示せるものは内陣床座の一
部にして、黒漆地に金銀蒔繪を以て海涌模様を拵かれたり、下繪は
狩野山樂に依て作られしものと傳ふ。

東京市神田区須賀町一丁目 須賀神社 鐵實實



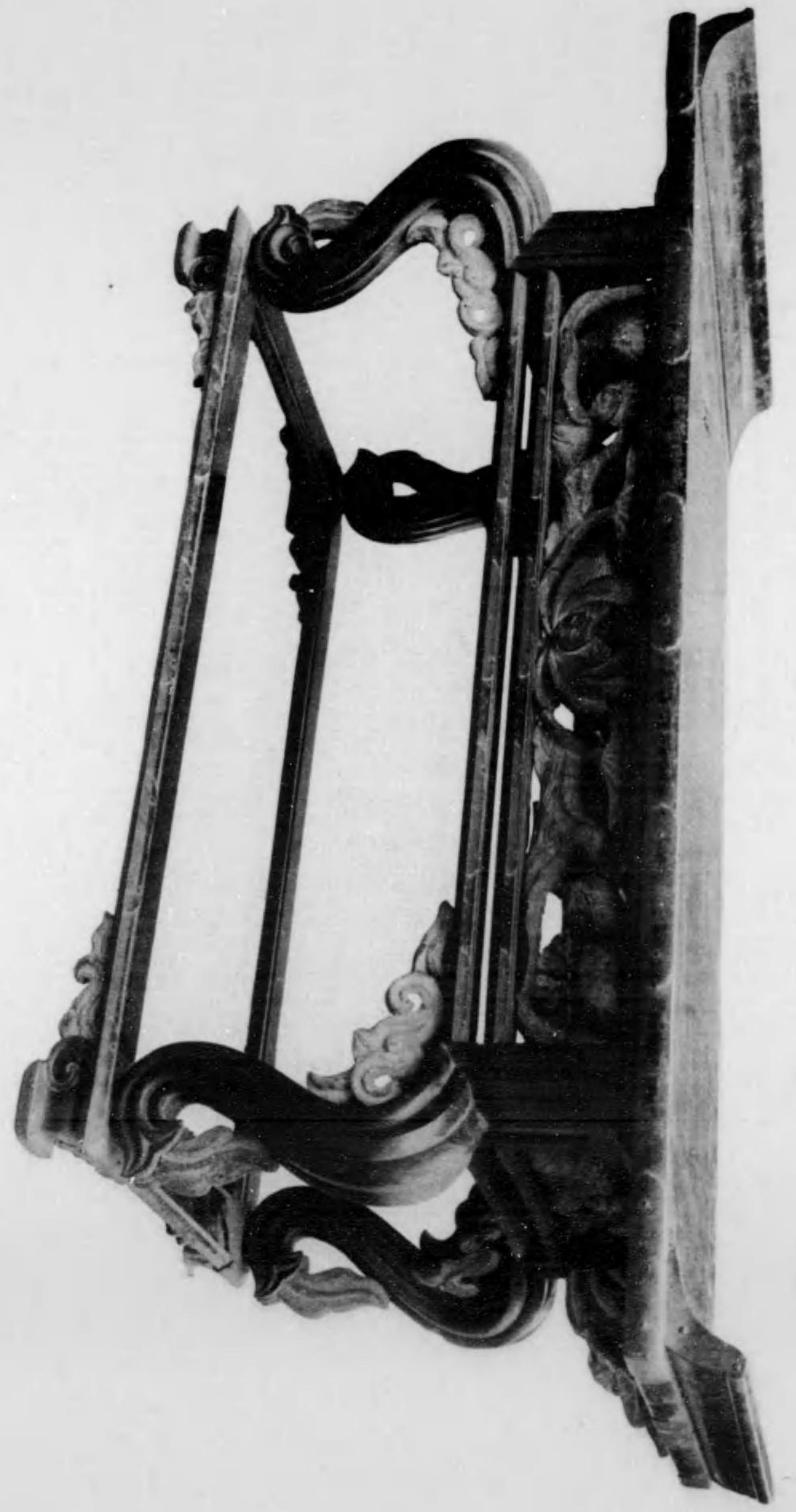
前 足 利 時 寶 殿 末 寺 机 藏

本品は往年薄田古藏より、竹生島辨財天の寶前に寄進せるものにして、全體黒漆地に朱塗の面を取り、所々に鍍金寶相唐草を毛彫せる。金具を打らねたり、甲板の兩端なる筆返しの様式は頗る古雅優麗にして、大に後世のものに勝れるところあり、其甲板の下部には蓮華唐草の透彫を嵌し、脚の持送り及脚端、轆轤の隅等には唐草彫の装飾を附し、皆胡粉地に彩色を施されたり、其刀法共に桃山期の勁技に到らず聊柔味を有する點も考察せば彼の天明の彫法を傳へたる所謂鎌倉彫、吉野彫等より感化を受けし過渡期に屬する作物なるが如し、甲板前面の小口金物の間に左の朱塗書あり。

來客進羽柴致前守内薄田傳兵衛昌繼也

總高さ二尺四寸二分、甲板總長さ三尺四寸五分、甲板幅二尺六寸六分、

前足利時寶殿末寺机藏



第六十八圖
 時 繪 鼓 胴
 鎌 倉 時代
 南 北 朝
 寶 篋 印 寺
 鎌 倉 時代

この胴も亦、永平年間鑄付によりて竹生島御寶印へ奉獻せられたるものにして「初書」添せられたり、現今胴のみを傳へて皮を遺失す。別紙目録の書續二通之の題ふ、今其内の一題を掲たり、文中御師所持云々の條項をを見る當時に銘物として明傳證書せられたり。左さすべし、地金部に黒鉛鉛を含有し、其上に雲彩を高野繪を以て描き出し所藏家を用ひ其體態美の部分には金銅を嵌せし今は多く散失して其痕を存するのみ。胴裡に朱漆を以て左の記文を青銅製年代恐らく南北朝時代を下らざるものなるべく、非種鑄制中年代を知らざる標準に買すべきものなり。蓋胴の中央に竹節の如き線あるは大體にのみ存するものにして小體には見えず。なし。圓徑四寸二分長九寸

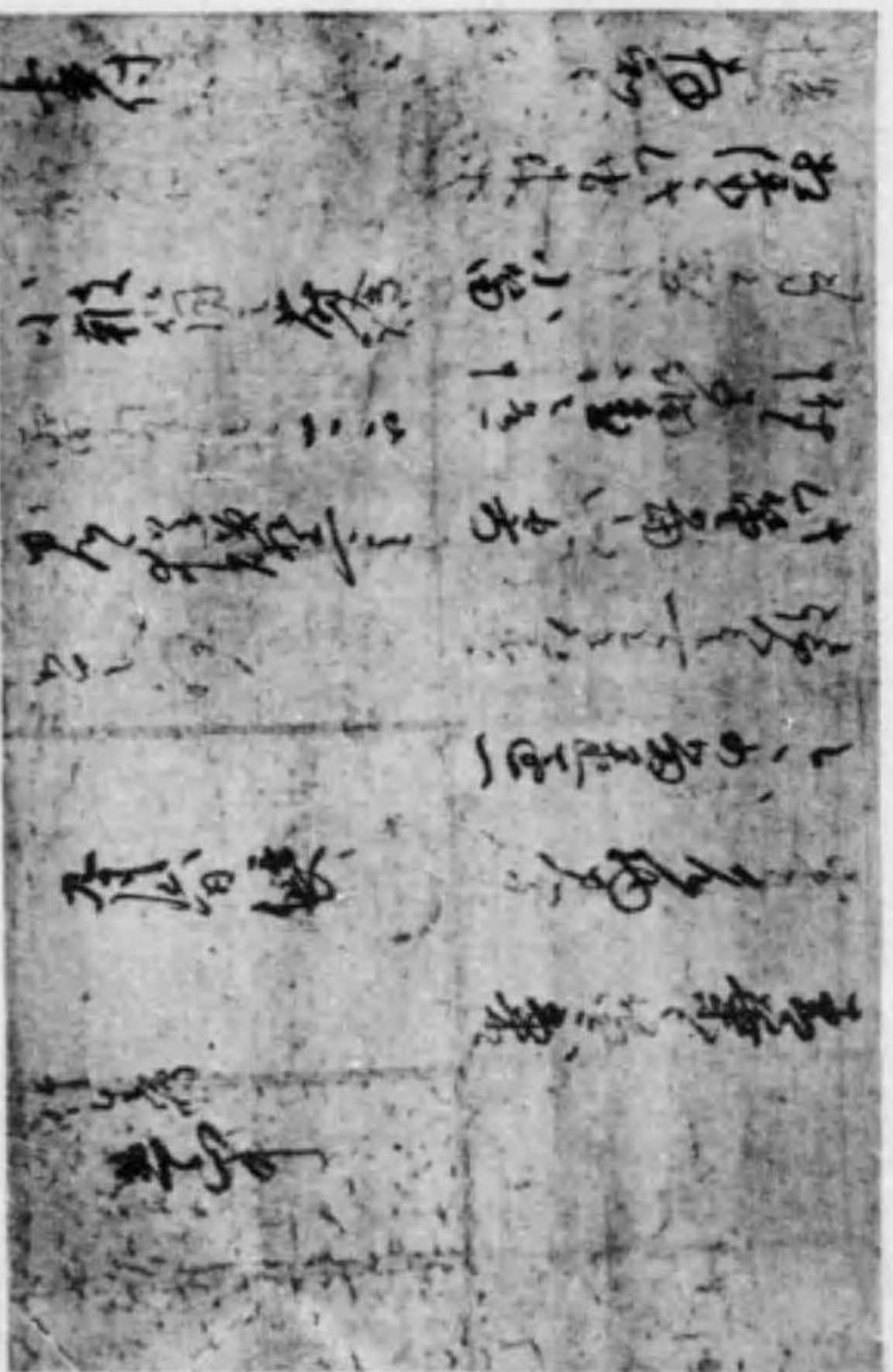
永享二年六月廿一日

源 左京大夫持信

奉寄進

竹生島御寶印

鎌倉時代一宮東照宮御寶印工

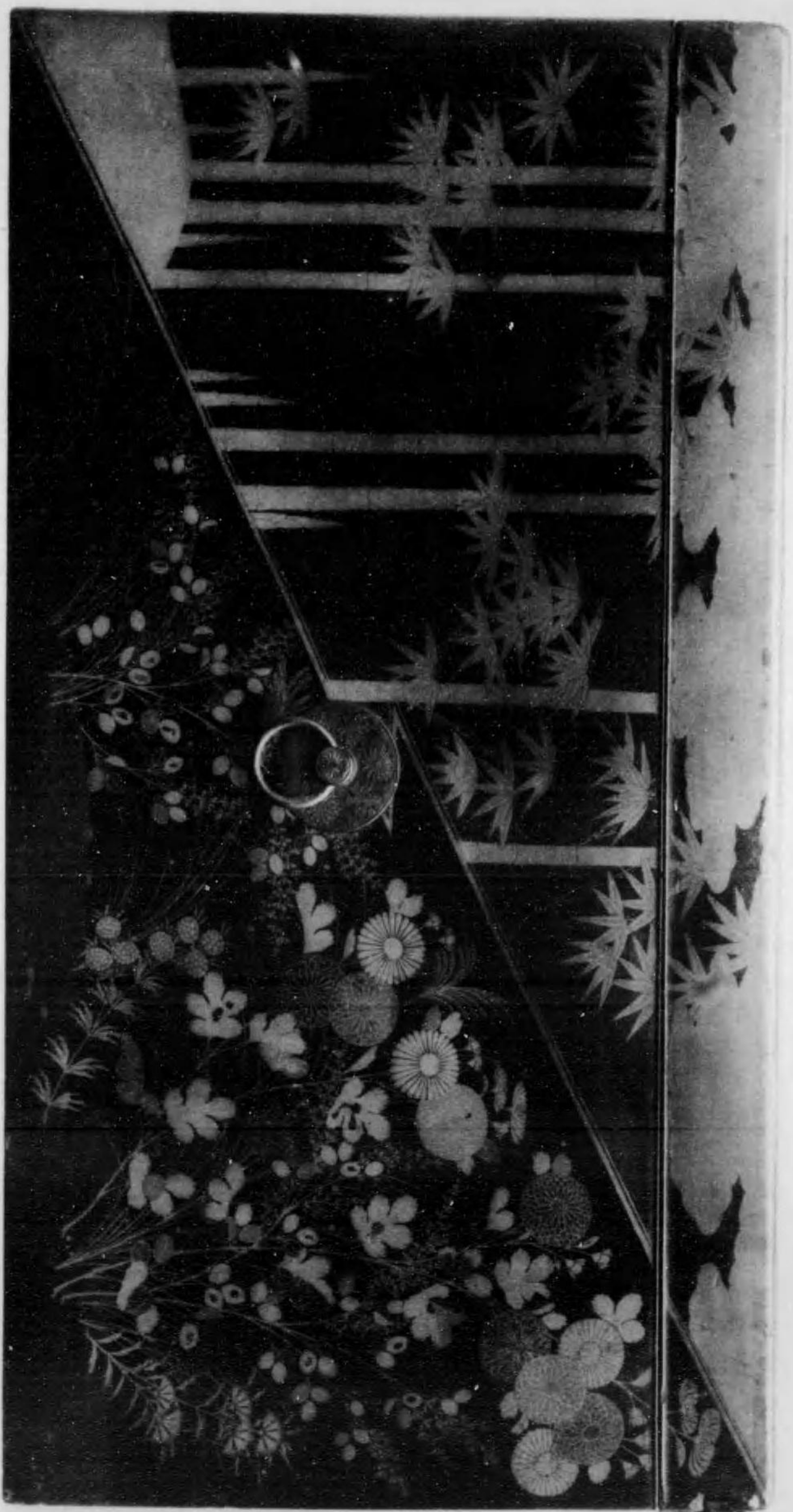


第八十圖
京都府高橋山時寺
文庫
詩繪手文庫

美上匠三郎第二十八圖に、同寺藏國寶詩繪手文庫一種の一なる模
 倣を載せしが、茲に掲げし手文庫も亦其例のに屬せるものじ
 て、圖は前面の一部を寫せるものなり、前面を手持て立て、精
 表形に屬し、一方には梨子地金時刺を以て、取手に竹の葉々た
 るを描き、一方には附け書き針葉の手法を文て、秋露の露を描
 る模倣を描用されたり、金具は鍍金梨子地に菊樹の紋を彫り
 基亦當代寶物跡を思ふべき資料たり。

總高六寸七分、長一尺六寸五分、幅二尺二寸強。

東京府京橋區高橋山時寺藏



四八十八番
 笠 屋 釜
 足 利 時 代
 大 清 右 衛 門 氏 藏

慶長船工の茶間は今之如く造り、其組は元朝の融化人にして、
 其前運賃船屋浦に移住し此後造り、爾來此船器物の良工を出
 せり云々、後「姓天公」の屋敷に造り給出せられしが、其後茶
 道の流行に伴ひて、慶長四年茶の釜を製出するに至りぬ、足
 利義政軍田に鹽屋と茶事を長や本在兼信に下納を請かしめ、之を
 鹽屋の地に造りて給出せしめたり云々、又傳書舟の長門、周防
 間を往来するや、此處の船工下納を請めたり云々。
 本品は鳥形、青屋の作に屬し、裏面銀付にして半面には龍虎を表は
 し、半面には遠山を景せる海上に帆船舟の船を繪せしめ給出
 せられたり、其作情類の趣致に當入國繪古様にして、普通船工の
 釜及すべからざる所なり、恐らく當代船匠の下納になりしものな
 り。

慶長船工一室所藏茶間茶釜



第九十八號
釜 尾 廬

代 時 利 尾
鐵 氏 門 衛 右 備 四 大 尊 殿 取

第八十八號
鐵 氏 門 衛 右 備 四 大 尊 殿 取

鐵 氏 門 衛 右 備 四 大 尊 殿 取





第九十圖
刺繡御袴裂
鎌倉時代
京都府某家藏

本品は、元宇佐八幡宮の撤下神寶にして御袴裂と稱せられしものなり、全面刺繡を以て圓の如く中央に間敷蓮、其周圍に錦花鳥を配し、數條の圓線の外には方形の廓を作
り、各々空間には寶相華を、其外剛には鳩を繡ひ出したり。手法古雅なる、片切繡、
縹ひ繡、寄せ繡、蕊屋へ等に依り、青、赤、黄、紫の彩繡を用ひたり、製作當時は頗
る優麗なりしを思はしむ、特に珍らしきは圓形及方形の廓を金糸を以て壓へたる事な
り。
金糸を古く用ひられしは、正倉院御物中之在り、鎌倉時代のものとしては、下總古
河、光寺に藏する靜所用之傳ふる舞衣、及本品に之を存す、以て當代金糸を用ひた
るを證する好資料なり。
本品の素地を爲す紗綾は、白地に梅枝の文あり、思ふに支那渡來のものなるべし、然
れども刺繡は我國に於て特に御袴として製作されたるものにして、當代工藝美術の精
華を發揮せるものなり。
縦一尺八寸、横一尺五寸七分。

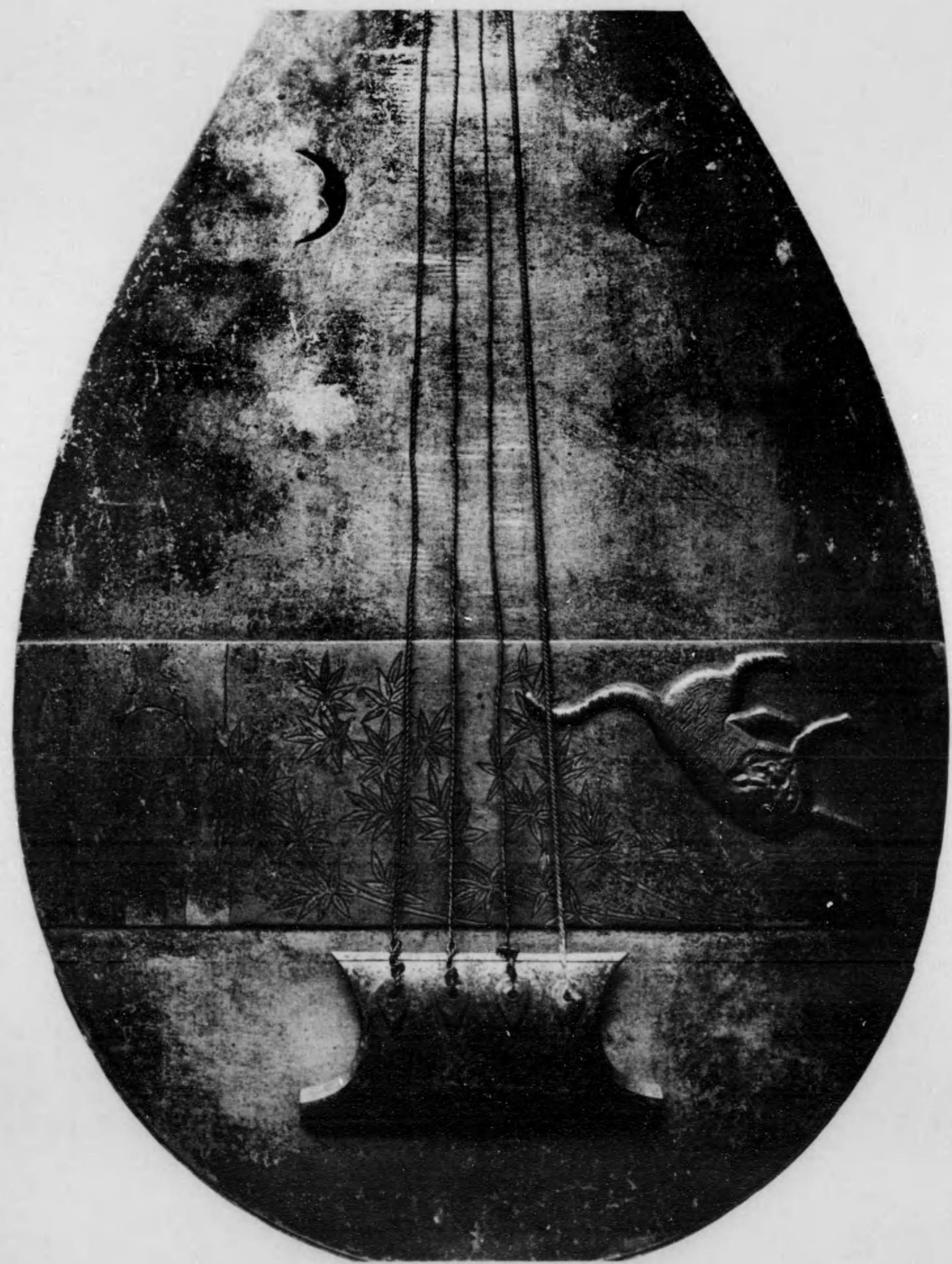
工芸美術史第一卷



第九十一圖
 國寶金銅琵琶
 鎌倉時代
 和歌山縣 丹生郡比賣神社藏

紀伊丹生郡比賣神社は所謂高野四所明神の一にして高野山の鎮守たり、其内三之宮、四之宮の二社は承元年中行勝上人の勸請に係るものとす、其の四之宮は嚴島明神にして本地財辨天なるが爲め神寶として献するに琵琶を以てせられしものならん、本品は源頼朝の室平政子の奉納せしところと傳ふ。素と神寶として製せられしものなれば實用のものにあらず極めて優雅なる小品たり、全體銅質鍍金にして腹板の箇所は鍍銀なり、撥面には月下竹虎の繪様を鏤し虎は薄肉に毛彫せしものを附け物とし、緒帯にも亦竹を筋彫りせられたり、其四絃は鍍金線を張り別に一箇の撥を添へられたり、其形式以て當時の風を徴するに足れり。長一尺六寸七分。

工部省美術研究所蔵



第九十圖
國寶金銅琵琶
鎌倉時代
和歌山縣丹生比賣神社藏

第九十圖の部分を表はしたるものなり。

工務所東京型版第一圖十第



第九十三号
注 水 製 陶

作 山 乾 形 尾

藏 校 學 藝 工 術 美 立 市 都 京 府 部 京

作者乾山は尾形光琳の弟にして、兄光琳に書を學び能く之を陶器の上を用ひたり、世に喧傳せられたる乾山燒是なり。本品に表はれたる描畫、又琳派獨特の妙味を存し其縱横自在なる筆致は他の追隨を許さざる所あり。乾山、名は惟元、通稱權平と云ひ、亦、深省、陶隱、紫翠、玉堂、瀛海、逸禪、習靜堂等の別號あり、始め洛西、鳴瀧に居をとし後、江戸に移り入谷に住す、享保三年(西曆一七四三年)齡八十一歳を以て歿す。

本品の高さ八寸二分。

第十卷第一號天竺堂藏書印



第九十四号
城端詩繪方盆形
 德川中期
 京都市立美術館蔵

本品は即蜜陀繪の命脈を傳ふる普通城端詩繪と稱するものにして、越中國東瀨波郡城端に於て製出さるゝを以て斯く名附け來りぬ、元と在の油に蜜陀僧を和して稠密ならしめ且乾燥を速ならしめ之れに五彩を配して描きたるものなり、今其創業を詳にせずと雖寛永年中同地の人、畑次五右衛門好永肥前長崎に遊び明人より其法を學習し、其子宣安に傳ふ、宣安醫を業とせしかば更に漆師佐々木徳左衛門信好に其法を授く、信好畫技に堪能なりしを以て其作るところ大に雅趣に富み益々妙作を多く出せりと云ふ、貞享元祿の頃白漆畫と稱し普く珍賞するところなる、次で小原理右衛門亮好其手法を繼承し子孫永く其業を世襲せり。本品は全部白地にして、其上へ五彩を以て見込に水汀に叭々鳥を描き、牽牛花を配し、周圍は花枝唐草及龜甲繁き等の圖案を布置せらるゝ、其手法の如きは蓋し徳川期に於ける一地方に發達せる工藝史を飾るべき特種の藝術として將た往古奈良朝の手法を復興せしものとして尙に尊重に價すべきものならん。

工部省美術院蔵

第五十九號
 國寶 豐臣 隆盛 山崎 元就 時代 坐像

茲に物ぐるは豊本團の長子丸丸の像なり、法名を
 祥雲寺殿玉護勝公神童と號し洛西妙心寺塔中玉鳳
 院に其廟を建設せられぬ、當時戰國の代能、快刀
 龍騰を翻ちて天下を一統し、餘威海外に馳せて皇
 神を催れしめし蓋世の英雄本團も愛見を失ふや
 轉た哀感斷腸の情轉する能はず、其頃洛東阿彌陀
 峰の慶現寺有積院の地に祥雲寺を營る所化和尚
 を開山とし其冥福を祈り以て靈を慰むる爲道像を
 作て同寺に祭祀せられしものなり、其後徳川期
 初め雨化の縁を以て妙心寺に合併せられぬ、之に
 因み塔中隆盛院に傳ふるもの即ち此像なり、本造
 にして全體に着色を施し玉眼を嵌入せらる、表着
 の表は白地に菊桐の浮紋を散し下着は表着質地に
 菊梅模を極彩色とし裏は孰れも赤色なり附紐の両
 所は背同裂を用ひらる、肌付は熳赤色細縦青なり
 手には扇子を携はれしものならんも今は失せて
 無し、昔時通常の衣服は袖丈極めて短かく所謂小
 袖なりしが此時代に於て小兒の衣服は既に振袖様
 の調製になれる事は該像に於て見えて、附附紐
 の結ぶる様など頗る風俗上參考に資すべき點ある
 を以て特に前後二様を掲げたり就て參照せられん
 事を望む。
 身長二尺四寸八分。

第三卷 第二章 國寶 隆盛坐像



第九十六号
 實 物 雜 山 時 船
 玉 風 院 代
 藏 所 家 寄

本品は豊臣秀吉の遺物にして船の形状を模せる玩
 具なり、竊に第八輯第八十圖に掲げし其判御禮籠
 守刀等と共に秀吉の歿後慶長元年豊太閤より妙心
 寺へ寄附せられたるものにして今同寺塔中玉風院
 に傳ふるところなり、船體の全部は金箔を貼し阿
 能より軸に亘つて朱の勾欄を圍らし、艦に船標を
 建てられし跡と思はるゝ穴あり、船首に入母屋造
 りの屋形を附し船尾には切妻造りに前間の突出せ
 る屋形を設けられぬ、屋形は孰れも全體に彩色を
 施し、屋上の如きは瓦を葺き割りと爲し五彩を以
 て縹緗に移され、明の間には金地に梅彩色を以て
 周圍に秋草を拵ける巻を捲らへ是亦朱の勾欄を取
 附けられたり、船底には更に床を設けて之に五箇
 の車輪を附して牽引すべくせり、是箱籠なる事三百
 餘年現在所々缺損損足跡ある而已ならず、彩色
 亦殆ど剥落せりと雖も當時の細細壯麗なりし事と
 小兒の玩具として殊に雄大なりしは真に豪者の跡
 を認ふべし。
 兼光生前傳役の人々この船上の間の間に在る臺上
 に幼君を載せて騎甲を曳き遊樂せしものと傳ふ或
 は然らん、歿後其臺上に遺像を安置し在世の面影
 を認ふ事とせられしが（其像は現在玉風院の廟所
 に安置のもの一茲に掲ぐるは臨濟院に傳ふる本像
 を矣れに代へ安置したるものなり）
 船の寸法軸より艦に至る六尺六寸、横巾二尺三寸
 船底床板長五尺八寸二分、幅二尺八寸九分。

第九十六号第一一號 實物雜山時船



第九十七号 立 菊 文 螺 鈿 鞍
 鎌 倉 時 代 之 保 助 氏 藏

中古の鞍具には水干鞍、軍陣鞍、關東鞍笠笠鞍、結鞍等ありて其形式法量等に異なり、其中軍陣鞍、關東鞍は互に類似の點ありて專ら源平以來關東武家の間用ひられしも今日世間に流傳多からず。爰に掲ぐるは燕漆螺鈿装にして滿地斷紋あり精緻なる立菊文を嵌し、細川保徳家の御耳木表文時雨莖手文等の螺鈿鞍に譲らず、其前後輪の内面口には微塵螺鈿を時きたり、其法量は前輪高九寸六分、背披二尺〇七分、居本全長尺三寸七分、乘間九寸六分、由三寸五分あり、所謂關東鞍にして鞍工の勾股法の規矩によりて造られたるものにして、前輪淵濱形迄の高さ即ち股六寸九分、背披の半分即ち勾五寸三分五厘、淵濱形より爪先迄弦八寸七分、略は勾股法の寸に合へり、本品類似のもの皆、源義經、佐々木高綱、足利忠綱等源平より鎌倉頃の將士の所用と傳ふるは其製作地と密接の關係あるべく、本鞍も亦源平時代の英雄の所用なりしならんも江戸時代に於て大目通り馬具商に秘藏せられ近時世間に出てしもの其傳案を失ひしは惜むべし。

第五十圖第一號 關東軍陣螺鈿鞍工



第八十九號
立 菊 文 螺 鈕 鞍
京都府關鐘會時助氏藏

第九十七圖參照

第十頁至二十頁附圖參照



第九十九號
立 菊 文 螺 鈿 鞍
鎌 倉 時 代
關 氏 助 之 保 藏

第九十七圖參照

第九十九號第一號寶篋印佛坐像





第 百 四 十 二 号
 縫 箱
 桃 山 時 代
 京 都 府 瑞 泉 寺

第一輯第十圖參照。

工 藝 博 物 館 藏 品 一 覽 表



第百一十四圖
刺繡釋迦如來說法圖
京都府勸修寺藏

上代は重に繡佛よりも多く繡佛を用ひられしもの、如し、吾邦上古の遺物として、中宮寺傳來の天壽國曼荼羅、及び法隆寺傳來御物間人皇后刺繡の佛天等を舉ぐるも、是等に匹敵せるものとしては、本品の如き蓋し相譲らざる逸品と謂ふべし、本品は寺傳によれば延喜帝の寄進し給へるものなり云へるも、同帝の寄進し給へるものは、五智如來の繡曼荼羅なりとあれば全く別物なる事明かなり、本圖を見れば釋迦說相の圖にして或る説には邦人の製作なり云へるも其説には同意を表し難く、製作年代は決して平安京に入りしものにはあらざるべく、圖様の雄大なるは色彩の之れに適應して壯麗、絢爛なるは其傳を求むれば獨り、法隆寺金堂の聖蹟あるのみ、彼の法隆寺藏、阿彌陀如來、觀世音菩薩、普賢菩薩像、及持幡童子圖の三幅、並に高野山の二十五菩薩來迎圖の如き遙に及ばざるものにして、殊に本圖中羅漢の持物、飛天の樂器等には既に奈良朝に於ても用ひざりしもの影からず、左上部の塙を吹ける或は阮咸を彈せる右方飛天の捧ぐる笙に歸し稱する長き細管の吹口を塙の横穴へ挿して吹奏せる、或は空侯を彈せる等皆珍するに足れり、殊に其上部に鳳凰に乗れる人物の節を拵けて來れるは、韓國の古墳中に多く見る繪にして、それ比すれば本圖の如きは却て精巧なるを覺ゆ、以て其圖様の徑路を語るものにあらずや。縦六尺八寸七分、横五尺二寸四分。

工部省美術研究所蔵



圖二百第
寶國
圖法說來如迦釋繡刺
代時平天
藏寺修勸府都京

本圖は第一圖の部分を表したるものなり。

絹一十卷廿一第東京美術院藏



圖三百第
寶國
圖法說來如迦釋繡刺
代時平天
藏寺修勤府都京

第一百圖全照

經一十第字一第天聖興光緒三

圖 四 百 第
皿 鳥 花 窠 谷 九 古

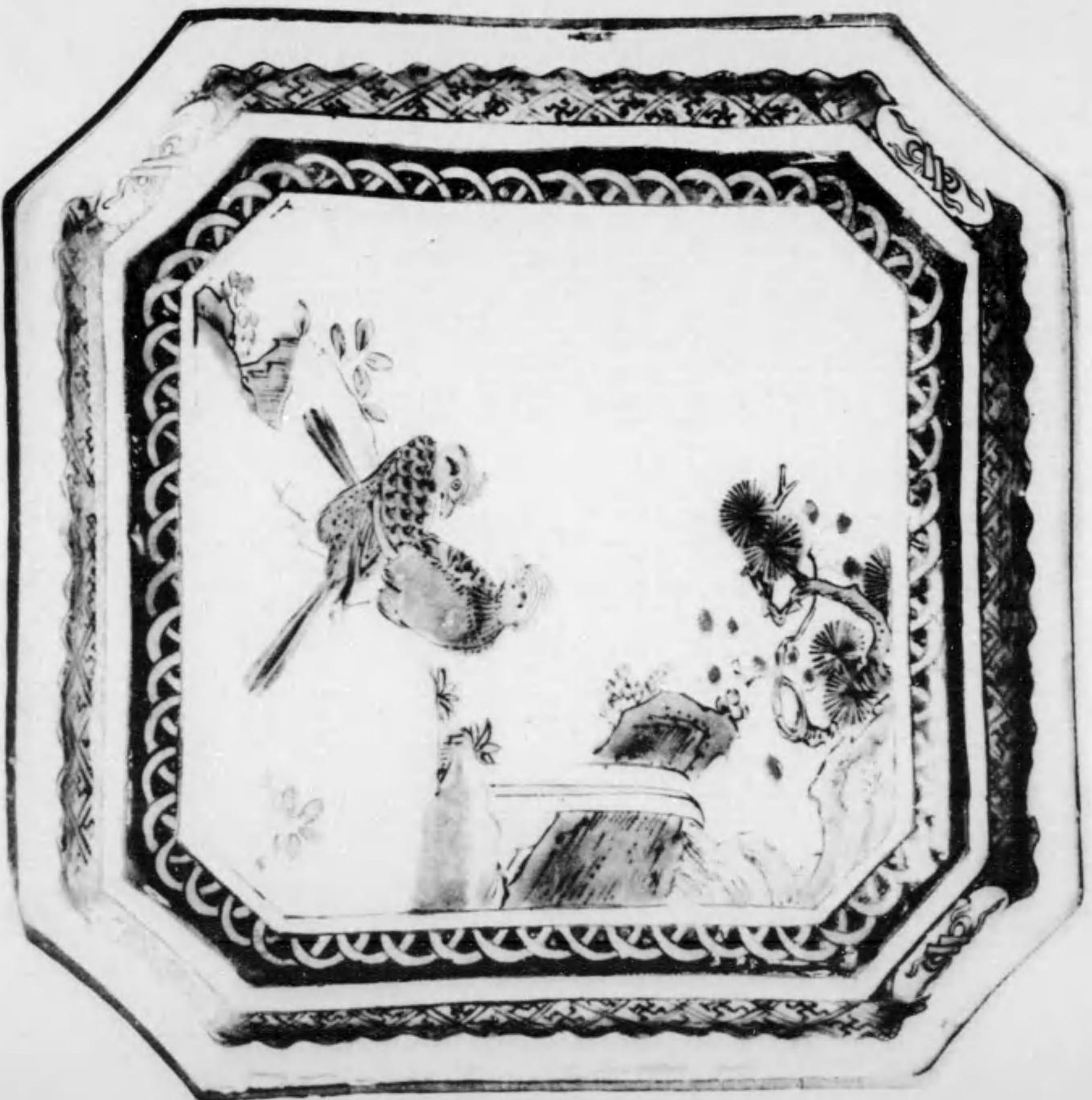
明 初 川 盤
鐵 工 立 縣 川 石 縣 川 石

本品は方寸、高九分五厘の皿にして描繪淺花鳥は青、紅、紫の五
彩を以て現はされ頗る雅趣に富むものなり。

九谷窯は寛永年間(西暦一六四三年)大聖寺の權土前田貞定
田村權左衛門に傳、翌前かしたるが所治年間(西暦一六五八年、一六六〇
年)利治の別所氏以後權左衛門をして、肥前有田に遷し國法傳はした、
本館鑑賞形法を得、權左衛門に之を復命し再び窯を興す、朝々京都の關八關守
於此地に遊ぶに當り招きて之を指導を得たり、所前守の卜辭にて五九谷と
稱するもの此時代の作なり。

本品は右縣立工業校の遺する珍多品を撮影せしものにして、陶器部共に
相續りたる、古九谷市の古鳥、稱すべきものなり。

鐵 工 立 縣 川 石 縣 川 石





第 百 五 十 四 号
金 唐 革
 德 川 初 期
 京 都 野 秀 峰 氏 藏

金唐革は十六世紀頃以來、伊太利邊にて製出せられ豊臣時代、南蠻人の通商に伴ひ吾國に舶載し爾來邦人の嗜好に投じて、逐年輸入せられ或は支那人によりても渡來す、多く玻璃鏡の外を張りしもの夥なかりしかば、益革三稱せられ邦人は之を以て手箱、藥籠の如きものより甲冑の金具廻り、刀劍の鞘等を張れる、或は下げ物、袋物等を製作せしにより其革の今日に傳ふるもの極めて少し、其金唐革三稱するは唐人の舶載せる金色なる革の義にして、模樣は浮出しを以て表はし、革全面に銀箔を貼し黄色假漆を塗りて金色とし、紋樣の空間は雷紋様の細紋を壓し、其上を淡青色の假漆にて塗り潰したるものなり其原型たる金屬型の影法は頗る精巧を極めたるもの之覺ゆ、本品は所謂人形手三稱するものにして、圖は西洋の神話を題材せるもの、如く、金唐革中最も優秀品に屬し珍賞措かざるものなり。

第百六圖に掲ぐるものは、所謂猿手三稱する一種にして植物に鳥獸を配せる複雑なる唐草文様を配し、上部は穹窿狀に裁たれたり、周圍に縫目の痕あるは、所謂益革にして嘗て鏡盒の外部に貼せられたるものなり。

本圖は縦二尺三寸一分、横九寸九分なり。

工 藝 叢 書 第 一 卷 第 一 十 四 號



圖 六 百 第
革 唐 金
期 初 川 德
藏 氏 峰 秀 野 狩 府 都 京

本品は第百五圖に説述せる様手に倣し、縦二尺五寸四分、横一尺三寸なり。

絹一十番第一番五景園美藝工

種三盒香繪詩

圖七百第 伊 總 山 時 代
 伊 隆 庄 兵 衛 氏 代
 京 都 市 立 美 濃 工 藝 校 藏

共に掲ぐる香盒の中、上三圖は伊隆庄兵衛氏の蔵に屬し、中央は其蓋表にして
 墨染獅子地に獅子牡丹を高岡に導續し、右側は蓋裏にして松に梅を描き、此
 右は身の風姿にして遂に相題を描きたり、圓筒形なる能く桃山時代の風格
 を表せり、下圖は京都市立美濃工藝學校の蔵にして、右は當時流行せる蓮が袖
 形に類する意匠より來れる袖卷の小袖の形に擬したるものにして、蓋裏の繪
 様を描きたるなる其襟及び肘、袂等の箇所にも刷ぬの痕を存せり、尙其左なる
 圓形の香盒は、唯地に三ツ盛鬚甲紋を本導續したるものにして尾形時代に於
 ける手箱中の散蓋せるものを應用せしものなり。

第七百一號 伊隆庄兵衛氏蔵



四八百第
鐘 銅
代 時 原 廠 開 製 有 限
院 院 滿 岡 製 有 限

鐘に掛る鐘は、世所開製鐘を傳するものにして、本邦に傳來するもの紛からざるも、本品の鑄造は、建永十二年、支那宗、仁宗帝の明道元年に成れるものにして、最後、隆安食の長元五年（開禧三十三年）に相傳せ、其後、鐘の精造は、建永元年の相傳せざるものにして、本邦に傳ふるものは、堪州開禧寺に存する、建永十年の銘文あるもの及び元之、肥前勝樂寺に存して、手採に出で、同六年の銘文あるの、其他、開禧州奉樂寺に傳ふるものあり、又、大昌龍鎮の眞神は、高麗國、鎭形、文龜、其傳、乳、推、雁の模、式、並に、上、帝、皇、同、鐘、の、原、衣、の、如、き、無、鐘、の、鐘、致、に、宮、六、且、つ、副、部、に、鑄、せ、る、飛、不、吳、裝、其、細、細、たる、銅、衣、の、精、造、等、其、鐘、傳、授、美、を、稱、め、たる、逸、品、たり、寺、傳、に、は、皆、没、入、財、來、傳、す、た、と、も、左、の、銘、文、精、造、代、の、傳、れ、る、もの、なる、を、證、せ、り。

大平十二年 甲午 月 日
青龍大寺
鐘 六 十 斤 六 匁
金 慶 口 様
梁 元 帝 十 四 年 口
院 院 院 院
口 徑 一 尺 七 寸 高 三 尺 七 寸 重 五 斤

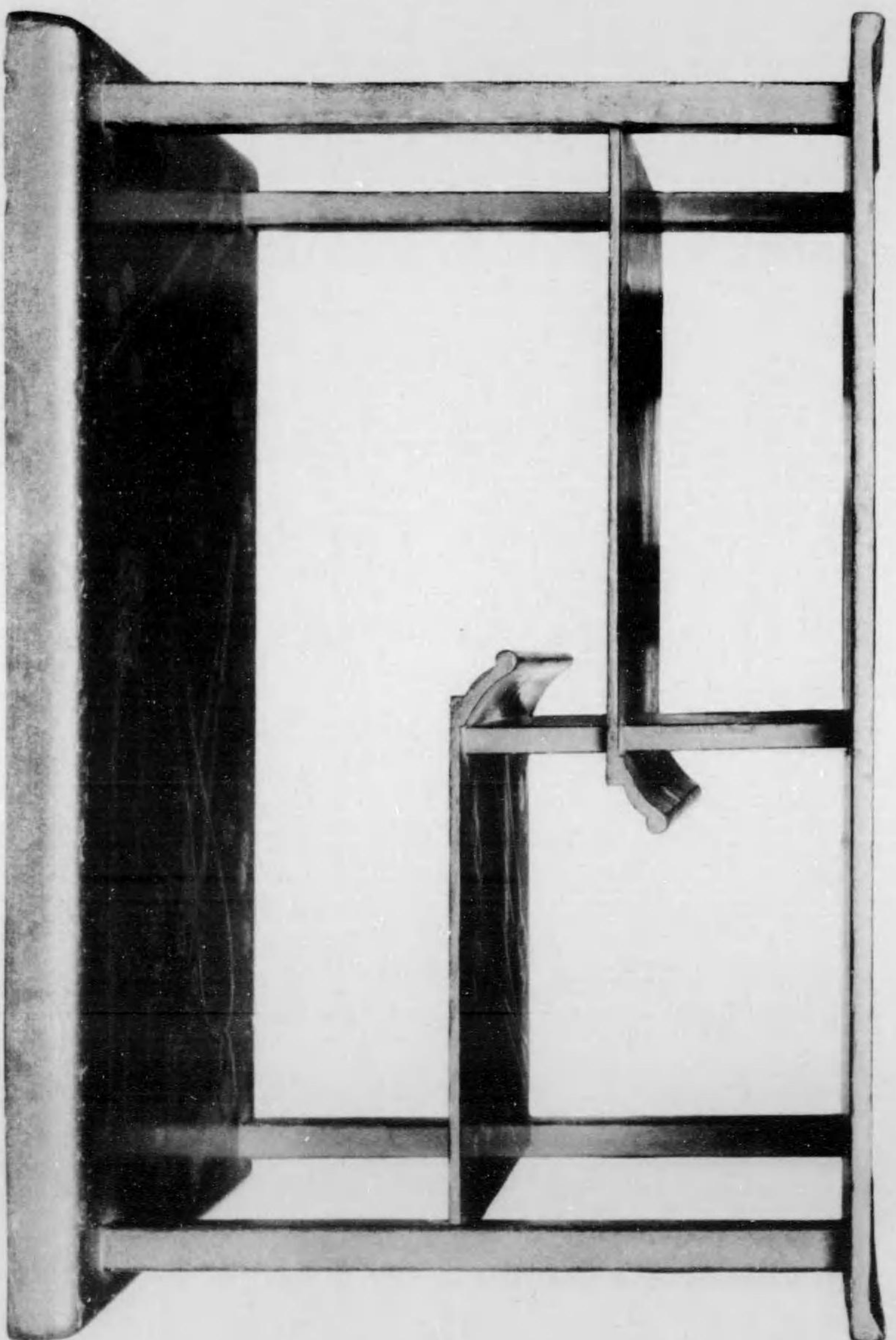


第九百四十四號
玉 鐙 型 式 圖
德 川 草 野 氏 藏

五邨天文年間、大國種子島の領主 時勢めてギキル人より小銃の方柄
 を傳へられしより以來、中國に傳播し、器の精緻なるものとして、一躍首位を
 占むるに至り、從て其彈丸の如きも、的を穿るの如き意味の紋樣として流行
 せしに至りしなるべく、本品は彈殼裝子地に附厚の赤繪を以て其裝飾を施
 すとす。器具を造られたり、構圖の粗直にして、多く他に類を見ざるものな
 り、思ふに本品の製作せられたし頃はその島の海外より輸入せられたり以來、成
 る鐵器を施して斯の如く繪施なる模樣を調製する類に乏麗用せられたるものな
 らへ、本品の如き文房を飾るべき欄に、故らにかゝる武軍に關するものを描へ
 來れり如きは、大に意義あるものとして、洵に巧なる発想と謂ふべし。

高さ一尺七分、上短幅九寸、長さ二尺七寸五分

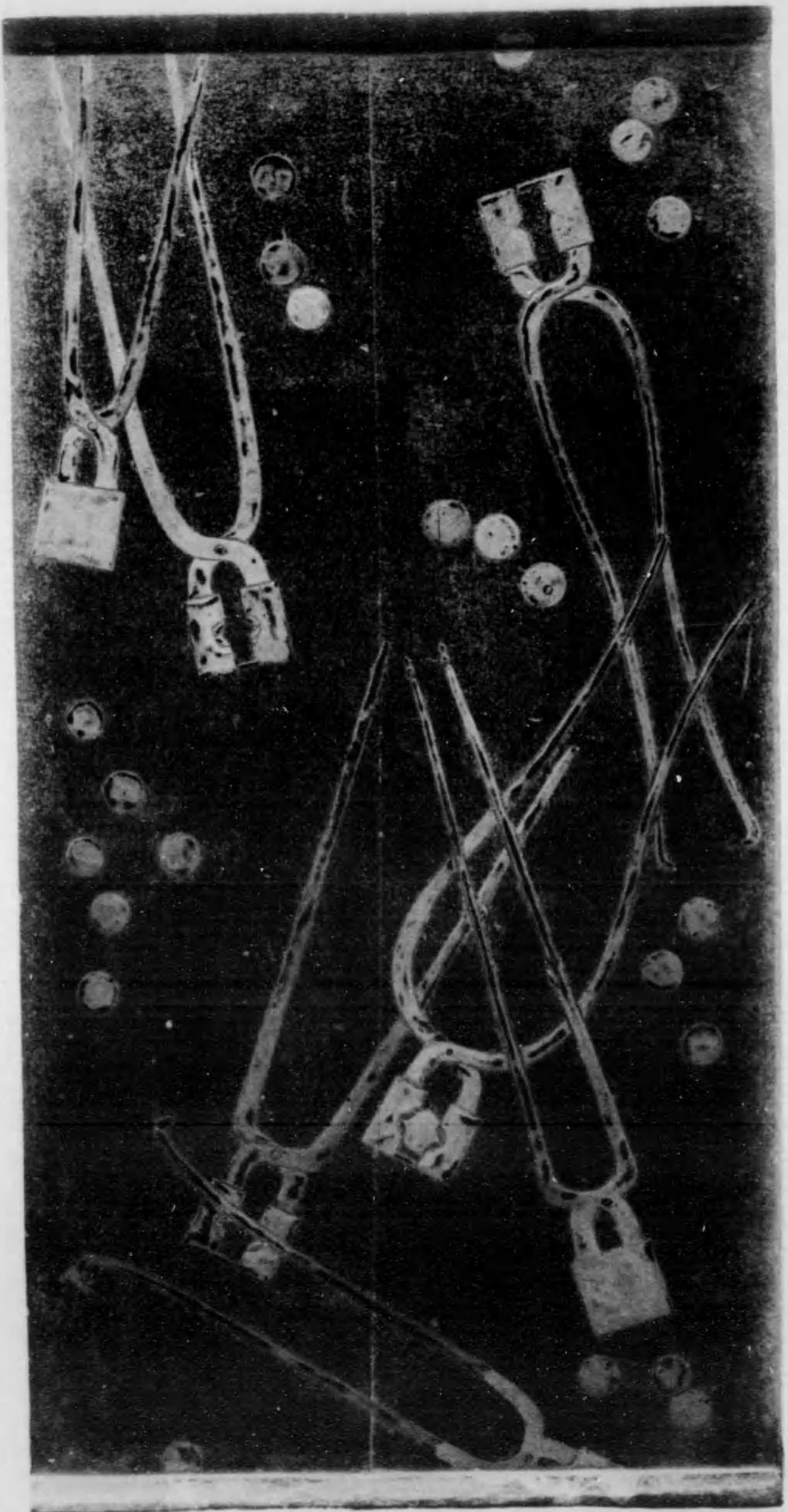
德川草野氏藏

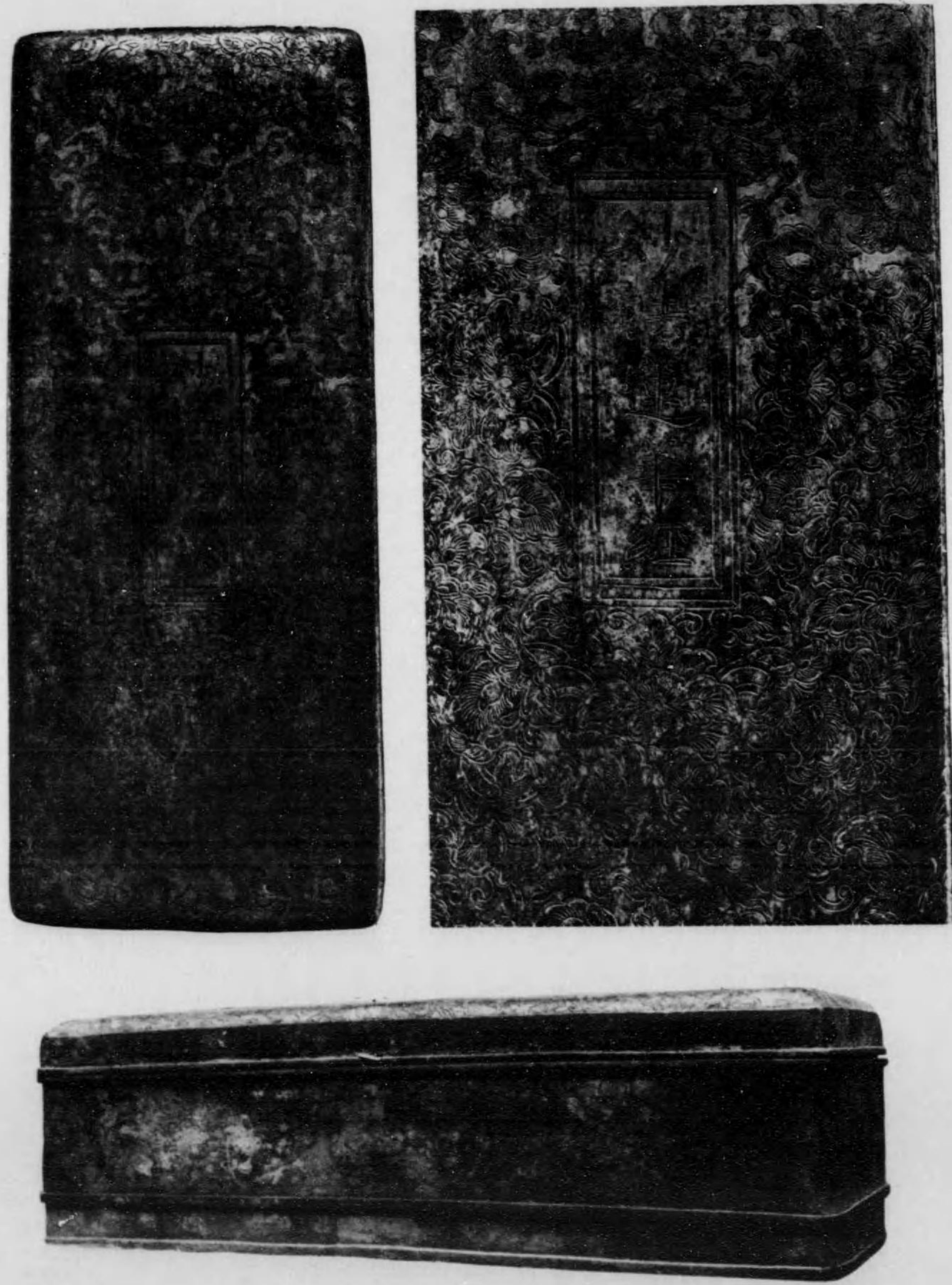


第十頁
玉鐲型詩繪
德川初明
長野草堂
氏藏

第九百九十五號

三卷五十一頁





第百一十圖
金 銅 經 箱
藤原時宗藏
延暦寺藏

本品は藤原時代の工芸品中稀に見る經箱にして、蓋表には滿地寶相華唐草を配し、中央に妙法蓮華經の文字を方形廓の中に毛彫にて表はし、身の周圍にも同唐草文を繞らし何れも精巧なる毛彫をなし、文様全體に互り鍍金色繪を施され、更に蓋及身の内部にも花文を散布せしめたり、所々に綠青を生ぜるも尙金光燦然として華麗を極む。本品は一様天皇女御上東門院藤原彰子(道長の女)の御願に依り、法華經一部八卷を書寫し納めたりと稱ふるものにして、假岳要記、並に如法門葉記等に見ゆる、如法堂銅筒記に據れば、長元四年八月七日(西曆千三十二年)僧覺越の發願に依り、慈覺大師の筆法華經を埋藏するに際し、門院其外簡を寄進して本品を共に埋藏せしものに當る、本品は最近北叡山横川より發掘せしものにして、之に類するものは金峰山出土藤原道長の經箱あり、共に時代趣味を表現せる尊き資料と稱すべきものなり。
蓋總長さ九寸五分、幅中央四寸、總高さ二寸七分。
右上圖は蓋表の一部を原寸に示したるものなり。

工部省美術調査部第一卷第二十圖



圖 二 十 百 第

裂 袴 御 繡 刺

織 氏 某 府 郡 京

第九十圖の部分を表はす。

昭和二十一年一月完成美術展出品



第三十圖
 杖
 錫
 天常
 平樂
 時寺
 代藏

近江甲賀郡石部之地たるや往昔、聖武帝滋賀信樂宮遷都の時、勅頭に依り此地に東寺
 四寺の兩刹を鬼門の守護として稱立せられぬ、今の長壽寺は即、東寺にして、本品を
 傳ふる阿星山常樂寺は即ち西寺に當れり、該品は寺傳に良辨上人所用のものなり云
 ふ蓋し當代に於ける遺品たる事は論を俟たざるころなり、杖頭は銅製四寶塔雲珠形
 にして、柄は雲檜に典雅なる唐花の螺鈿を嵌せられたり、遊環は全部逸失し、螺鈿
 は殆ど脱失せられたるも全體の形狀に至つては洵に天平時代に於ける高麗なる趣致を
 具備せるものなり。

昭和二十一年一月東京美術會館



圖 四 十 五 第

鏡 獸 神 年 五 武 建 齊

藏 氏 郎 太 從 國 富 府 都 京

直径七寸九分あり、故宮國謙藏氏蒐集漢式鏡の一にして、銘文に建武五年宋國云々の銘あり、南齊代の製作なるを推し得るもの。構圖は神獸鏡中内區の神獸を一方より觀るべく配し、半圓方形帶之を繞り、外區に繪文様を置ける最も複雑なる式に屬せり。文様の刻鏤頗る精緻にして、實また良好の白銅より成り、今まなほ白光をこむる處現存漢式鏡中稀觀の逸品なり。

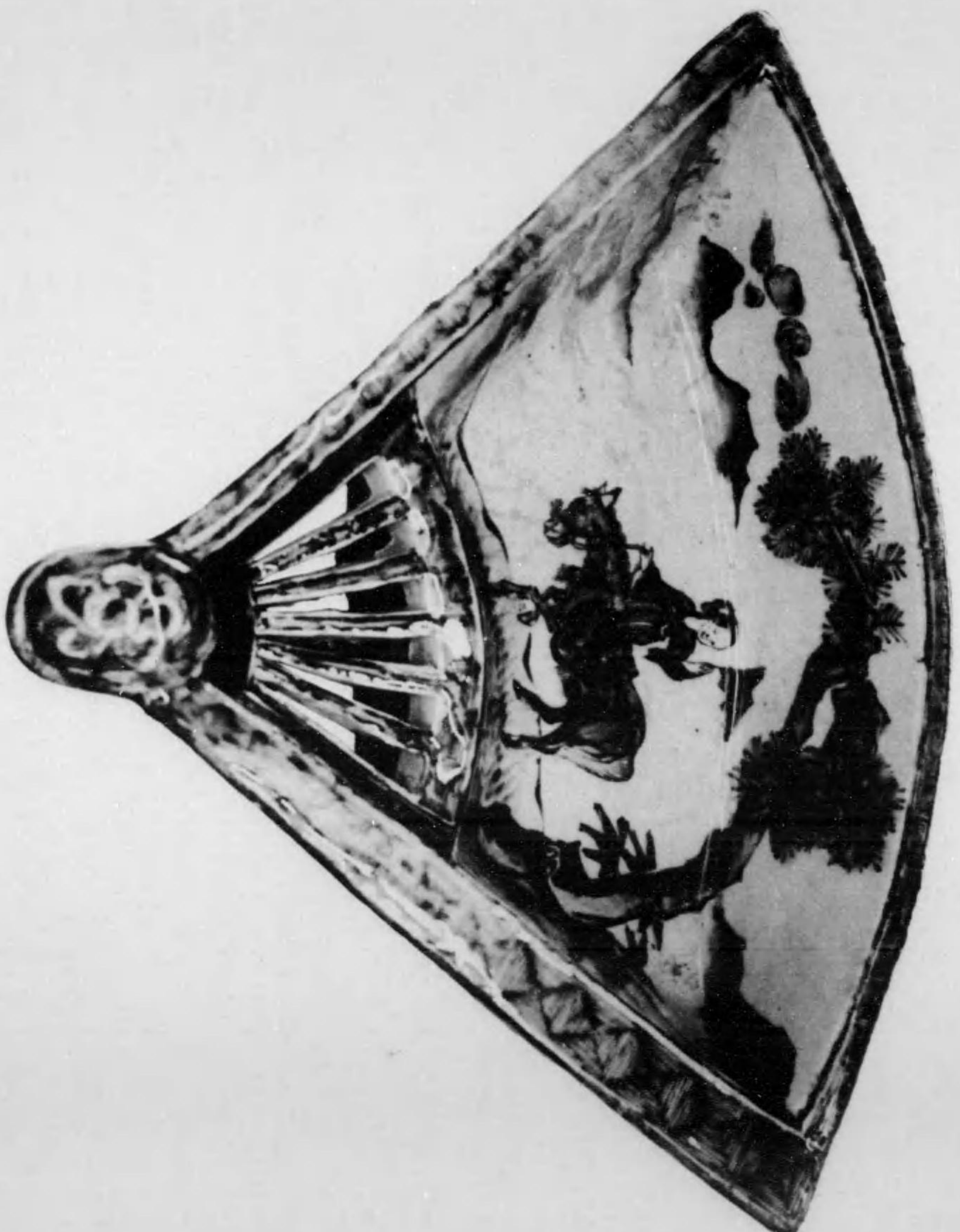
圖 二 十 五 第 一 部 京 都 府 國 立 博 物 館 藏

鉢式扇開製陶

藏氏七徳村野 軒張大

作者木齋即藤原佐俊傳又、八十八之云ひて來なし
 自ら來中百瀬するに及び來米之説す、又は九國
 古説の辨の、文敏年間(同曆千八百十八年十八
 百二十九年)粟田に宮を開き來いで清水に移る、精光來
 陶家の出に非ず、風流じて廣く書を讀みし語を能くす
 又古器を觀覽し之を極するに長ず、陶を瀬川に學び、及
 び深く唐土の細法、水陸を研究し遂に幾件、真鍮の法を
 傳ひ又茶器、經、赤繪、金、交趾、磁等を造するに妙
 を得たり、故傳傳に稱しては、乾山、仁濟、未到の地
 を拓きて遂に虎の坂に據す、本品は翁の作品中優秀な
 もの、こにして、匠士天宮石に依りたるもの、如く
 實は原稿にして細繪、全體厚作にして幾成面に墨調
 の畫あり、藤原村其種り面に照き方の現れを見る、圖
 は吳州を以て明於描かれ、地紙下の部に來米送と同じ
 く吳州を以て記さる、然れども翁の作品は何れも其博學
 多能に基礎を置きたる處に依りたるものにして模造を
 事とせざるにあらざる、蓋し作品の一部に素人味を存する處
 に多大の感興を感ずる物なり。

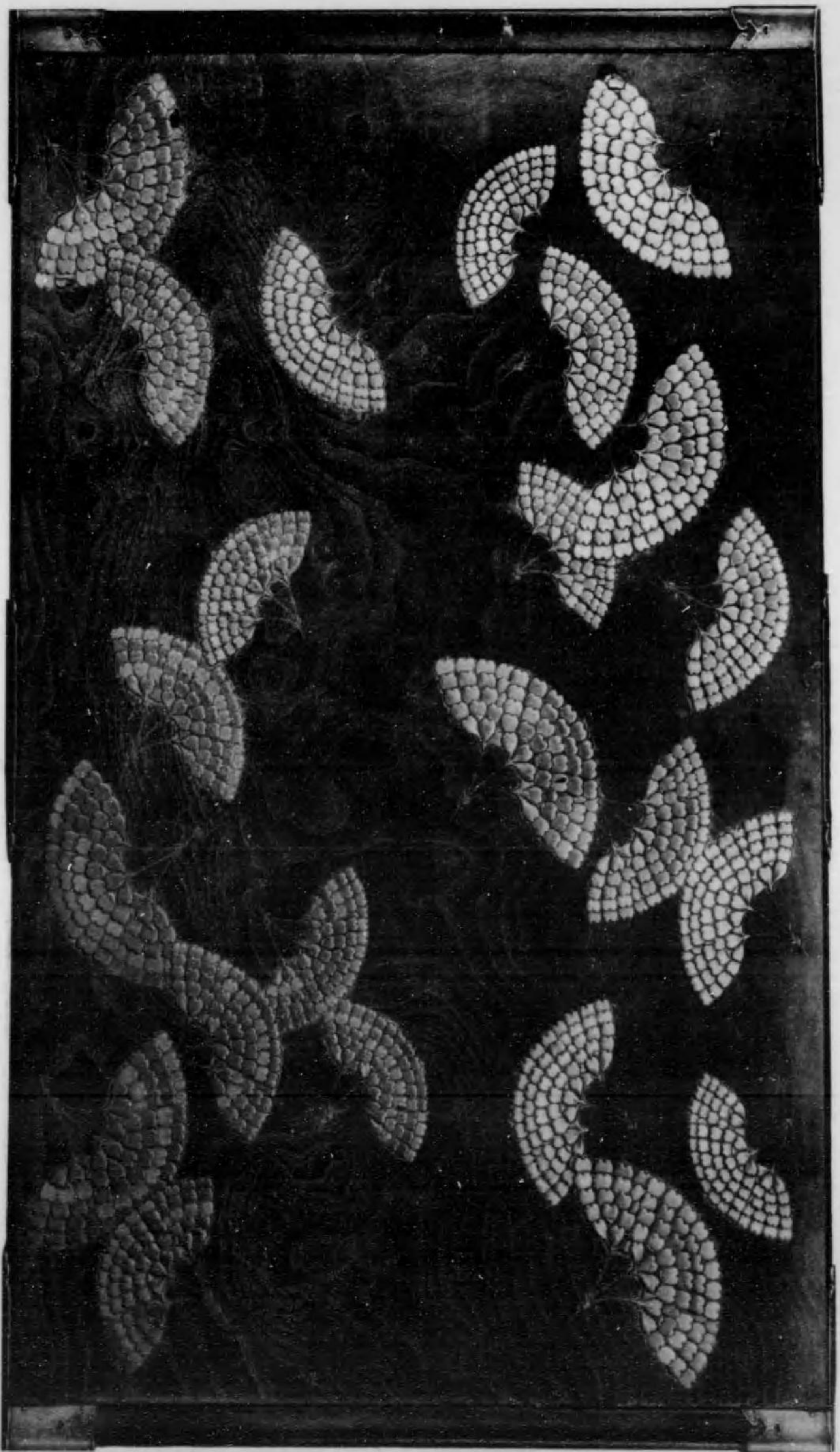
圖二七番第一圖(原稿)藤原佐俊傳工



第七十卷
藤繪文臺硯箱
其
京都府知事
川邊
末
院
明
藏

藤百十六圖文亦印板名五十二

明治二十九年一月三十一日發行





青磁獅子香爐

第百八十四回

明時代

京都府聖澤院藏

本品は所謂七官手と稱するものにして、全體に薄き青釉を施し表面に多くの
環瑠あり、色は稍淡き感あり、雖も此種の青磁器にして推賞に値するもの
謂ふべし、形は圓に觀る如く頭を反らせ胸を張り其重心を胴部にもたせ、更
に四肢を以て之を支へしめ、また右方の前肢は稍前に突出せしめて全體を半
ば側面より觀せしむるに細心の意を凝きあり、大體に於て首尾脚足の均合極
めて良く、形も亦頗る引縮まりたるものなり、恐らくは慶長・元和頃の渡來
品なるべし。

高さ六寸。

工部省美術調査所

蜀 紅 錦
 法 隆 寺 天 隆 寺
 法 隆 寺 天 隆 寺

本圖に掲ぐる二品は、世に蜀錦を稱するものにして、
 繁華朝頃造られたるものなり。現今の細の織物の製
 作は其緒を斷らたり。右圖は格方格々の間に八重菊
 及其周圍に繡文あり。四隅に外より内に向つて差の如
 きを配す。縦は同じ方格の中に蘭草花の如きものある様
 を以て境をなす。此色は赤、花文は青、紫、黄、明黄等
 に成り。當時の織物中特殊の趣致を存する稀絶の物に屬す。
 正倉院御藏の織物中本圖に類するものあるも格様式を異
 にせり。惟ふに當時表形物織成は打敷の類に用ひられ
 し物ならむ。

工部省博物館蔵

左圖は蘇芳色の地に、以て文を成したり。
 この文様は印度、波瀾のものに基調する點あるを思は
 しむ。何れも當代工藝美術の著名傑作好資料たり。

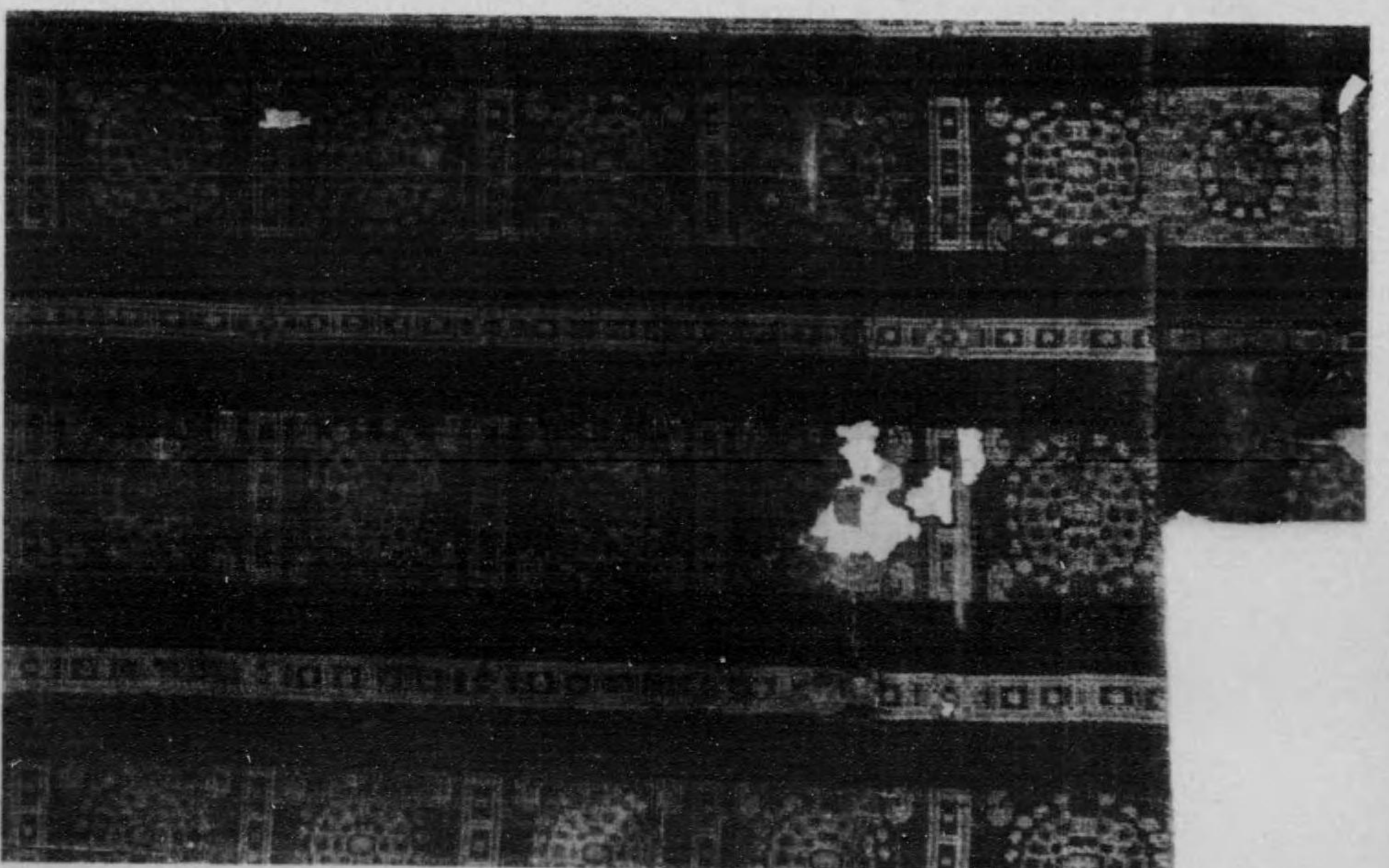
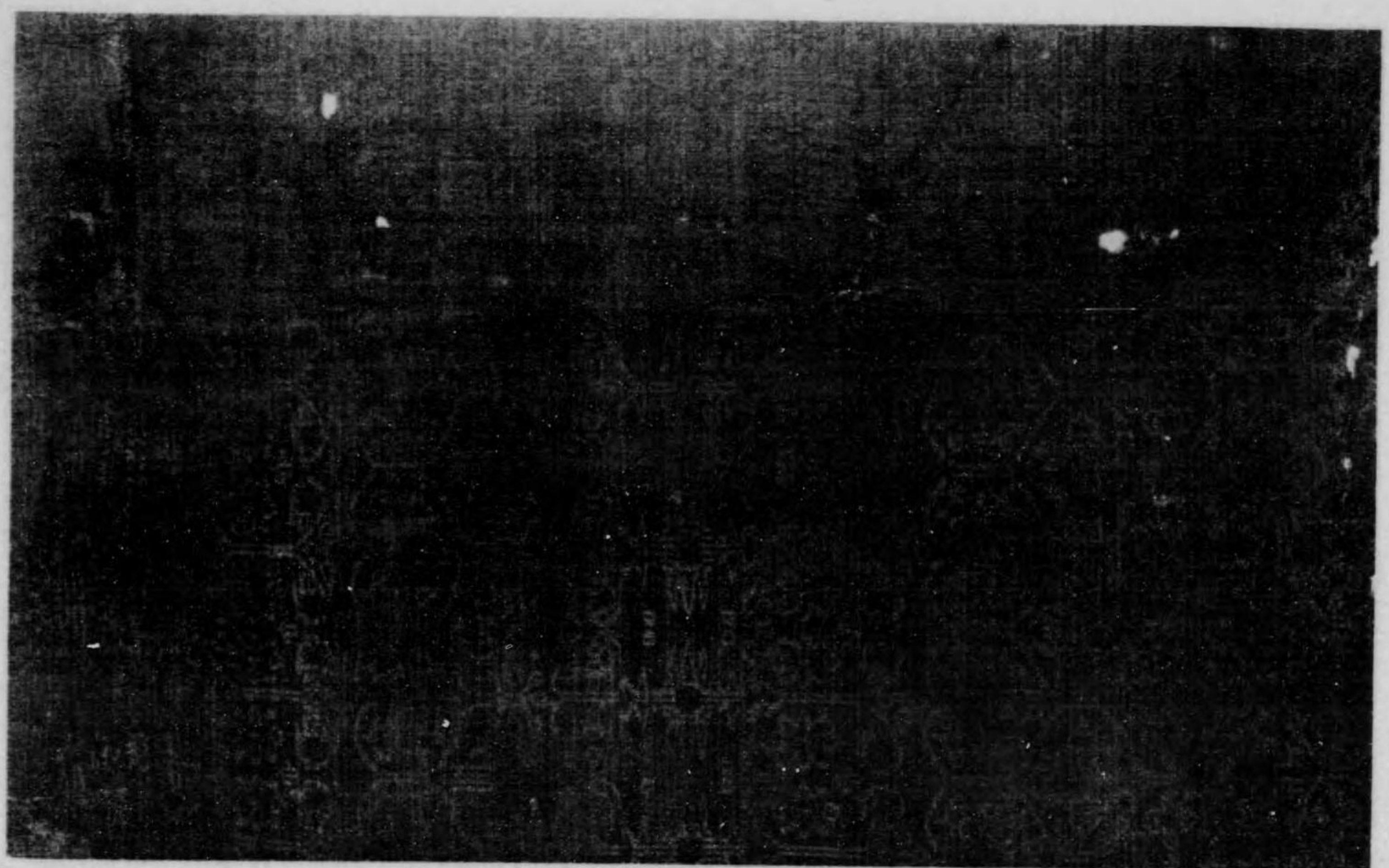


圖 十二百第 盆 香 繪 詩
 代 時 山 桃
 總校學藝工術美立市都京 府 都 京

本品は、明治全葉香繪にして、所々官員を嵌められたり、古來縁起繪を意味して農業に題材を採り來つて、是を香繪に作るもの多からず、京中制作若くは牧園の如き趣きあるところにして、本圖は五月の御田野に男女打交り、遊明の節面白く打踊つ、各一團を作つて早苗を植付くる様を表はされたり、其服装より察すれば女子の態、栴檀に似たる成は被りもの、唐人笠に似たる如き、悉く桃山時代の風俗たるべし、其下繪は當時流行せし屏風描かれたる、豐國祭圖の筆者たりし野村晴隱の如き、流の風俗畫を能くせる繪師の手に成りしものなり、其趣、頗る滑稽優麗なる作的にして、繪師たる彼文の描法を、眞實推察するに勝たり。

縦八寸五分、横尺三寸、高さ一寸二分。

圖二上冊第一頁末部新編圖工



終